

コミュニケーションとしての音楽

—異文化間で人を結びつける役割の考察—

佐賀大学大学院修士課程

教科教育専攻 音楽教育専修

塩 田 英 樹

目 次

はじめに	- 1 -
第 I 章 現代におけるコミュニケーション	
I - 1. 国際関係に見るわが国の現状	- 2 -
I - 1. 1 国際化がすすむ日本	
I - 1. 2 同質性と日本	
I - 1. 3 近隣諸国との理解	
I - 2. 交流が不足している現代	- 5 -
I - 2. 1 子供をとりまく環境	
I - 2. 2 大人の状況	
I - 2. 3 異国に住む人	
I - 3. 人と人がつながることによる利点	- 7 -
第 II 章 非言語コミュニケーションについて	
II - 1. コミュニケーションとは	- 10 -
II - 2. 非言語コミュニケーションの概念、および特徴	- 11 -
II - 2. 1 言葉では表現できない何か	
II - 2. 2 非言語コミュニケーションとは	
II - 2. 3 非言語コミュニケーションの特徴	
II - 2. 4 その他の特徴	
II - 2. 5 異文化との非言語コミュニケーション	
II - 3. 音でコミュニケーションできる可能性	- 17 -
II - 3. 1 人類に共通する音	
II - 3. 2 自然界での音を使ったコミュニケーション	
II - 3. 3 声をつかう人類	
第 III 章 コミュニケーションとしての音楽の特徴	
III - 1. 音楽を構成する要素	- 23 -
III - 1. 1 音楽の中のリズム	
III - 1. 2 音の高低	
III - 1. 3 和音	
III - 2. 音楽で伝えられるものとは	- 28 -
III - 2. 1 洞察の共有	
III - 2. 2 音楽から受け取れること	
III - 3. 人々の心を動かす音楽	- 31 -
III - 3. 1 聴くことと感情の動揺	
III - 3. 2 感情の表現	
III - 3. 3 人々をつなげる音楽	
III - 3. 4 思い出す～時空の超越	
III - 3. 5 社会を動かす音楽	

第Ⅳ章 異文化と交流を進めるための視点

- Ⅳ-1. 異文化を理解するために - 42 -
- Ⅳ-2. 違いの中にある共通性 - 43 -
- Ⅳ-3. 違いからの学習 - 45 -
- Ⅳ-4. 新たな文化の創出 - 47 -

第Ⅴ章 まとめと考察

- Ⅴ-1. 異文化間交流における留意点 - 52 -
 - Ⅴ-1. 1 実際の音にふれる
 - Ⅴ-1. 2 性急な判断を避ける
 - Ⅴ-1. 3 背景を知る
 - Ⅴ-1. 4 よい音楽にふれる
- Ⅴ-2. 音楽をコミュニケーションに役立てる - 54 -

- 引用・参考文献 - 56 -

はじめに

およそ3年前まで筆者は北海道で中学校の音楽科の教師として生徒に指導をしていた。その当時、音楽の授業に真面目に取り組もうとしない多くの中学校の生徒に出会った。それは、彼らが受験科目ではなくて興味・関心のないジャンルの音楽を“なぜ学ばなくてはならないのか”という目的意識が薄いことが原因になっているようであると、筆者は気づいた。そして、そのことがきっかけで「音楽が生活の中でなぜ必要であるのか」ということについて改めて考え、音楽の果たす役割について研究したいと考えた。

現代社会の中で、小・中学校での音楽科は受験科目に比べると比較的重きを置かれていない状況であるが、筆者は音楽が人の心と心を結ぶということでは、大変重要な役割を担っていると考える。言葉が使えない動物も“音”によってコミュニケーションを図っているし、多くの人々がコミュニケーションを図る上でさまざまな面で音楽を取りいれている。国際的視野でみると、ましてや言葉と言葉が通じない異文化間の交流を図る上では、音楽の果たす役割はさらに大きなものがあると思われる。

そこで本論文では、特に異文化間の交流を図る上で、「音楽にはコミュニケーションの媒体としての役割があるのではないだろうか」という考えをもち、“コミュニケーションとしての音楽”というテーマを設定し、研究していく。

わが国では国際交流が進み、異文化に触れる機会は年々増加している状況である。そういう中で、異文化理解の一助になるであろうと思われる“コミュニケーションとしての音楽”について研究をすることは大変有意義であると考えられる。

2000年1月31日

塩田 英樹

第 I 章 現代におけるコミュニケーション

I - 1 . 国際関係に見るわが国の現状

I - 1 . 1 国際化がすすむ日本

日本の常住外国人の数(単位;万人)

右の表にも見られるように、今日の日本において国内に常住している外国人は一昔に比べ急増している¹⁾。その理由の一つとしては、留学の他、研修で来日した人々がそのまま就労し、この表には表れていない数で、不法に滞在している外国人が増えてきている現実もよく言われている。このような状況の中、学校現場での国際化も進んでいる。日本語を使いこなせないため、特別な教育が必要な外国人の児童生徒は、1995年には全国で約1万2千人にのぼり、該当する子供がいる学校は10校に1校の割合にあたる約3800校になった。子供人口の減少が続く現代でも学校現場の子供たちの国際化は全国的な広がりを見せている²⁾。

	1970年	1995年
常住外国人	60	114

日本の国際人口移動(単位;万人)

また、交通機関の一つである航空機の伸展により海外への渡航は以前に比べ、短時間で、安価な費用で行けるようになった。そのためか1970年から比べると約10倍以上もの人々が国を出入りするようになった³⁾。川田順造は「交通・通信技術の発達によって、人と物と情報の移動と混交が急速に進み、世界はリアルタイムで結び合わされ、文化の地球化が起る」⁴⁾と述べているが、人の行き来だけではなく、現在は衛星放送で世界各地の情報を知ることができ、また、外国のデータベースから情報を検索したり、他人にメッセージを伝えたりすることができる。鈴木裕久はこのような状況について次のように述べている。

	1970年	1997年
入国者	174	2159
出国者	174	2148

「従来のコミュニケーション研究の時代にはこのような状況は考えることもできなかった。研究者たちの調査研究の対象は、一対一の対人的関係、家庭、小集団、コミュニティ、都市、そしてたかだか全国規模でのコミュニケーション、マス・コミュニケーション現象の範囲におさまっていた。(中略)しかし、今後の研究ではそのようなわけにはいかず、調査研究の視野を国際的規模にまで広げる必要にせまられることは明らかであろう。」⁵⁾

このように流動的な国際化のすすむ現代を考えるにあたって、これからのコミュニケーション研究は世界的規模で考えられなければならないということであろう。国際関係につ

いては、川田侃が「国際関係論の研究においては、なんらか結びつく利益があるとすれば、それは一国の利益ではなくして、世界の利益、世界の平和でなければならない。」⁶と述べている。つまり、同じ文化の人との関係だけでなく、今後は世界の異文化の人々との友好な関係を築く観点に立って研究を進めていくことが必要になっているのである。

I - 1. 2 同質性と日本

前述のように、国際化がすすむ中で、“わが国と他国間の相互理解”はどのようにすすんできたのであろうか。

今日相互理解を図る上で、障害としてよく指摘される日本人の特徴に“同質性”（他の違った文化・考えかたを認めがらない）ということが挙げられる。それは、島国に育った日本人の国民性もあるが、^{カンサンジュ}姜尚中が「戦後の高度経済成長以来、同質的な社会の方がより効率的であるとの考えが多く国民に植え付けられ、社会の中で異質なものはいない方がいいと考えられた」⁷と述べているように、それぞれの個性を尊重するというより、受験中心に“効率を第一に考えられてきた”教育からの原因もあるだろう。学校現場で起こる“いじめ”の問題などは、この“同質性”を重んじる日本の典型的な現象が端的に顕れている一つの例である。

社会でも日本人を“単一民族”として考え、“自分たちとは違う民族”ということを経由に“在日韓国・朝鮮人”を蔑視する問題がたびたびニュースに取り上げられている。しかし、定形衛が「いかなる民族、文化も異質な部分と同質な部分を相互にもちあわせており、日本文化もこれまで他の文化、とりわけ中国、朝鮮の文化を吸収し、今日も共有しているものが少なくない」⁸と指摘しているように、日本民族も他のいろいろな文化の要素を受けて変化してきた歴史があり、単独に成立してきた民族であるとは言い難い。

日本社会は“同質性”を強調して、“異質なもの”を排除する傾向があるが、ここで同じ日本人の中でもいろいろな文化があり、“外来性”“異質性”があるということを見据えることが重要である。異文化の問題は「国際間」だけの問題ではなく、世代間や地域の環境の違いによってもさまざまな観点からとらえることができるからだ。東京大学の稲垣忠彦は「国内の文化を“単一的なもの”として捉える感覚が、やがて異なった文化の拒否や排除につながっていく」と危険性を指摘している⁹。

それぞれの民族の文化は、その文化の中で生きている限り本人に意識されるにせよされないにせよ、個人を拘束している面がある。川田順造が「教育や差別、政治の圧力やメディア等を通じて文化は操作され、人間を拘束し、服従させる」¹⁰と述べているように、他の影響によって身近な異文化の問題は操作される可能性を秘めている。例として川田は「失業者の問題が移民労働者の敵意となってあらわれること」や、「体制転換期における財獲得からの排除が民族差別の敵意としてとらえられること」を通し、他の問題が“民族の問題”

にすり替えられている現実を指摘している。メディアなどの操作にされかねない現状の中で、“同質的”な考え方に陥りやすい日本人は、今一度自分たちの中にある“異文化”の存在を認める必要があるだろう。

I - 1 . 3 近隣諸国との理解

近年、ヨーロッパで EU 諸国の連携や、ASEAN 諸国の協力の動きが見られることなど、地理的・文化的な意味でも、近くの人たちとの友好を深めていくことは将来を考えていく上で大切なことである。しかし、われわれはいったいどの程度、近隣諸国のことを理解しているのであろうか。

日韓交流体験をテレビ、著作などで紹介している黒田福美は、「韓国を話題にする時に、依然として韓国に対するイメージとして“焼肉”“チマチョゴリ”がある」ことをあげている¹¹。韓国といえば、日本と同じように多種多様な新しい文化が発展してきている国であるが、韓国の文化事情を知っている人はそんなに多くはないのではないだろうか。実際、近くの人や文化のことは“意外と知らない”のが現実かもしれない。その例として、1969年に東京で行われた“NHK アジア民俗芸能祭”で、小泉文夫が述べた印象の中にみることができ。

「インドネシアやタイやインドの人たちが、自分の国の芸能はよく知っているのだけれども、隣の国の芸能について何も知らないんですね。しかも、インドの古代叙事詩の『ラーマーヤナ』だとか『マハーバラタ』だとかいう共通テーマでいろんなことを演じているにもかかわらず、よその国で同じ題目をどんな風に演じているかということを見たこともない。」¹²

小泉文夫は著書の中で、「アジア人同士がアジアを知らないで、みんなで一斉にヨーロッパやアメリカに目を向けていた」という現実も指摘している。確かにアメリカを中心とした市場経済の流れに乗って、多くの国が欧米に目を向けてきた現実がある。しかし、近くの国や文化こそ歴史の上でもわれわれと密接に関連しあっており、本来であるならば互いのことをよく知っている親戚のような関係にあるはずである。

不幸なことに、過去には友好的な関係を結ばなければならないはずの近隣諸国との間に、反目し合う関係があった。岡部朗一は「国と国との政治・経済の“ハード”の関係が円滑に進展している限りでは、人と人とをベースにした“ソフト”の関係でコミュニケーションの問題が顕在化することはめったにないが、逆にいったん国際関係が悪化しだすと、コミュニケーションの問題が一気に噴き出す」危険性を指摘している¹³。このことから、国際関係がなんとか保たれている現在、われわれはもっと近隣諸国の人と普段から友好関係を結び、お互いの文化について理解をしていく必要があるだろう。

I - 2. 交流が不足している現代

今までは“国際関係”における現状を中心に述べてきたが、“文化の違い（異文化）”はわれわれの身の周りでも見かけることができる。稲垣忠彦は“異文化”について「国際間だけではなく、世代間、地域による文化の違い、言葉の違い、民族の違いなど、国内の異文化問題も含めて異文化という問題を考えることにしました」¹⁴と述べている。このように同じ日本の中にも多様な文化の網の目が存在し、個人個人が違う文化をもっていることを音楽評論家の朝倉久人は次のように指摘している。

「同じ東京のどっかに住んで生活していても違うし、同じ家に住んでいる家族の中でも違うわけですね。なぜかというとな人一人の人間が全部複数の役割をしょっているわけでしょう。ある人間はうちに帰れば父親で、外に出るとサラリーマンで、どこかに行くと、同級生の集まりでサ、一方遊びの場では、競馬仲間とかもある。そういう八つも九つも役割を一人でしょっているわけですね。」¹⁵

「学校は社会の縮図である」という言葉を聞いたことがあるが、これは異年齢や違う環境に育った子供たちが、異文化が同居している社会状況に似たものがあることを述べたものであろう。では、このように異なる文化があるわれわれの社会において「人とのつながり」をみた時に、現代はどのような状況になってきているのだろうか。“カテゴリー別”にみていくことにする。

I - 2. 1 子供をとりまく環境

まず、子供を対象を絞って考えてみると、異年齢の仲間と一緒に遊ぶ機会が奪われていることがあげられるだろう。昔は異年齢の集団が遊ぶ風景がよく見られたようである。

この原因としては、子供が自由に遊べる場所の減少や、塾やお稽古事などに時間を使う生活の変化、また、犯罪などの増加により「室内でテレビゲームでもしてもらった方が安全」という親の判断などがあるかもしれない。その上、少子化により“子供に個室が早くから与えられた”ということが、一人でも遊ぶ楽しさを早くから知ることになったのではないだろうか。それを裏付ける記事が次のようにある。

『物と遊ぶ』子供はいったん個室へ入れば、誰に煩わされることなく快楽を享受できる。そこは子どもの秘密の文化的空間である。この密室の中で、子どもは物と対話し、物との遊びにふけることができる。」¹⁶

いずれにしても、集団で遊ぶ経験が以前に比べ少なくなり、異年齢に限らず“友達との

つながりが希薄になってきている”ことは確かであろう。現に筆者が以前勤務していた学校でのようすを思い返してみると、同じクラスの仲間とは遊ぶことが多いが、他のクラス、ましてや他の学年の子供たちとは「遊ぶ場面を設定してやらない限りつながりをもつ機会はありません」ことを記憶している。ベネッセ教育研究所の報告では「キレる」生徒に見られる点として“一緒に喜んでくれる友達がいない”ことや“落ち込んだ時、話を聞いてくれる友達がいない”ということあげている¹⁷。このことから、子供にとってコミュニケーションをとる人がまわりに必要である、ということがいえるであろう。つながりの希薄になった子どもたちを結びつける何かが求められている気がしてならない昨今である。

I — 2. 2 大人の状況

次に大人の方はどうであろうか。余暇開発センター発表の『レジャー白書‘99』によると、従来の余暇観である「休養やくつろぎ」「気晴らし、ストレス解消」「スポーツや趣味を楽しむ」などが依然として主流を占めていたが、今後の希望として「地域活動やボランティア活動」、「余暇活動を通じて社会に貢献する」が15%を数え、50代男性の意欲と積極性が目立つということである¹⁸。同センター研究の主幹である山田絃祥氏は「職種や肩書きとは関係のないネットワークづくり、違った社会参加の形を求めている」と述べている。ここには企業人としてのつながり以外にも“人間としてのつながりを見つけ、何らかの貢献をしていきたい”という意欲の表れがみられるが、これは人間のもつ本能的なものではないだろうか。

しかし、総務庁が行った「高齢者の地域社会への参加に関する調査」¹⁹では“近所との付き合い”“親しい仲間”“若い世代の交流”の点で以前より低下が見られるという。高齢世代の孤独死の問題が一時期話題になったが、こうした人間同士の付き合いは年配になると求めなくなるのだろうか？そうではないだろう。世の中には、自分の好きなモノとの関連を重視する、俗に言う『オタク』と呼ばれる人たちが存在する。彼らは一般的に“自分の殻に閉じこもり人間としての付き合いを拒む”という見方をとられがちであるが、船津徹は『オタク』もまた他者との関連を求めている。人間の自我が社会的であるからであると述べ、そうした人たちも人間としてのつながりを求めていることを示唆している²⁰。

年配になるにつれて、プライドを気にしたり失敗を怖れたりして他人に対しての積極的なアプローチがしにくくなるためか、友好関係が固定化し、心を割って話せる人間が少なくなるのかもしれない。友達との付き合いを大切にすオランダでは自殺率がとても低い²¹そうであるが、そうであれば“バブルが崩壊し不景気の時代になってから中高年の自殺が増えてきた”のはそうした人間的なつながりがあれば、もう少し状況は違っていたであろう。

I - 2. 3 異国に住む人

最初で述べたように、現在日本には多くの外国人が居住している。しかし、“文化の違う”国ではその生活上の問題は数多いにちがいない。名古屋国際センターの調べでは、在住外国人が抱える問題としては1番として“言葉の悩み”があげられているが、2番目には“精神的悩み、友人関係”がきているという²²。ザイールからきた研究者であるサンガ博士は、日本語・英語ともにできない自身の妻が日本に来てからずっと家の中にいて一步も外に出ない様子を述懐している²³。言葉が違くと意思の疎通もできず、考え方や話題にすることも違ったりして、なかなかうまくいかないことが推察されるが、言語の違いは致し方ないとしても“精神的な孤独”は耐えがたいものがあるだろう。

海外に進出している日本人も、日々の現実から孤立し孤独であることをビジネスコンサルタントのクリスティーナ・ウェルティが指摘しているが、彼女は成功している人々の例を次のように挙げている。

「私はこれまでに例外的な何人かのすぐれた人たちに出会いました。現地の言語を学び、友達を大勢つくり、現地の人々の信頼を勝ち得た日本人幹部たちです。この人たちは、共感する力を伸ばしたおかげで、境界線を乗り越えたのです。」²⁴

つまり、現地の人々と積極的にコミュニケーションを図っていった人たちが成功しているということであるが、どういったことで“共感”をすることができたのだろうか。つながりをつくるための“何か”があれば、たとえ異国に住んでいたとしてもコミュニケーションをとることはできるだろう。

3. 人と人がつながることによる利点

これまで“他人とのつながりが不足している”現状をあげてきたわけであるが、それでは「他とつながる」ことがどうして重要なのだろうか。日本青少年研修所が中高生を対象にした調査によれば、「日本の中高生は、将来に希望が持てない若者の数が米国や韓国、中国の若者よりずっと多く、21世紀の未来に期待していなかった」ということである²⁵。村井孝至はこの事実について述べた中で、「自分のことばかり考えていては、心がやせ社会は荒廃する。他国の人のことを隣人のように思うことは多少のエネルギーと想像力がある。しかし、心は広くなり、太っていく。」と締めくくっている。経済優先で物事が考えられ、精神的な価値が軽んじられてきた現代で“自分のことばかりを考える”現代日本人の現れ

が、この調査の結果のように若い世代に反映しているのではないか、という気がしてならない。

ここで、樹木の例で考えてみようと思う。神津善行によれば「樹木が集団で林や森を形成すると、根の世界とは関係なく空間で繋がっているらしく、種類に関係なくいくつかのグループを形成するが、このいくつかのグループのどこにも所属していない樹木は育ちが悪く人間的な表現を借りれば村八分にあって枯らされる運命にある」²⁶ということである。また神津は、「情報交換が生存競争に関係あるのではないだろうか？」という結論も述べている。他の仲間とつながることで、見えないパワーをもらっているのだろうか。日本の若者も一人のときはおとなしいが、集団になると急に力を出してくる。このパワーは周りとのつながりを感じているからでてくるのだろう。

樹木に限らず、地球上のさまざまな生き物が助け合って生きているという現実は今更いうまでもないが、奥山徹が「時間と空間の壁は航空機の発達により次第に取り除かれつつあり、ネットワークコミュニケーションの発達によりその傾向はますます強まっている」²⁷と述べているように、今までは狭い国で助け合ってきた人たちがこれからは異国で生まれ育った人たちとも協力していかなければならない時代になってきた。

昔から国の枠を取り払い国際関係理解のために尽力されてきた方々がたくさんいる。そうした人たちは「いずれもが個性を持ち、個人どうしの心の通い合いを大事にし、そして、人と人とのつながりを保つ努力をするということにおいては、共通のものを持っていた」²⁸という。この努力なくしては生活状況の異なる文化の人々の理解は難しかったのであろう。また、これらの人たちの底流に共通する経験としては「外国の人との深いレベルでの出会いの喜び」や、「文化を異にする人間同士が理解し合えたときの感動のような体験」²⁹が土台になっているという。このような体験があったからこそ、いろいろの阻害要因があっても、最終的には、このような個人が国際交流を支え、推進していったのだろう。

朝日新聞では「国際理解などのイベントが形式主義に陥っている」という現状をあげた上で、次のように締めくくっている。

「最後にボランティア的な民間レベルの国際交流への関心と指示を呼びかけたい。例えていえば、よそ行きよりも普段着、豪華な宴会よりも家庭料理のような草の根の地道な活動こそ、21世紀にあるべき日本の国際理解への展望を確実なものにするであろう。」³⁰

ここでも述べられているように、われわれの地道な活動によってできた人間のつながり・連帯が、国際的な社会の未来を決定するといっても過言ではない。今日、数多くのNGO（非政府団体）や地方の交流組織、ボランティアグループの指導者たちが活発に活動をしている。そしてこの人たちは、多くの難しい条件のなかで国際交流活動の進展を図り、内外の同じような目標を持った人たちや組織と深い信頼関係に基づく連帯を図り、このつながり・連帯を通じて、それぞれの目標を達成する努力を続けている³¹。

われわれが参加する民間の交流のつながりは、国などが行うものに比べれば小さなもの

かもしれないが非常に重要な位置を占めている。国際交流をしている薩摩焼窯元の大迫一輝は「草の根の交流のメリットは企業や国家主導の時と違い“利害関係”がないため、多様な価値観が生まれ、視野が大きく広がる」と述べ、また日韓交流体験を紹介している俳優の黒田福美は「民間での交流は、行動することで実感や感動が伴い、受け入れられた時の喜びが大きく、『誰かに知らせてあげたい』と、次へのステップの喜びがある」と述べている³²。

他人とのつながりが不足している現代、やらされているのではなく“自ら生き生きと取り組むこと”が継続した交流には必要となってくる。そのためにも、難しく考えることなくとも楽しんで取り組めるコミュニケーションの在り方が今後われわれに求められるポイントではないだろうか。

<注>

- 1 『統計で見る日本 1999年版』日本統計協会発行、1998、44 p
- 2 『教室の国際化進む』朝日新聞 1996.2.16 日付朝刊
- 3 前掲 1、42p
- 4 『文化の未来』川田順造・上村忠男編、未来社、1997、12 p
- 5 『高度情報化社会のコミュニケーション』東京大学新聞研究所発行、1990、10 p
- 6 『国際関係概論』川田侃著、東京大学出版会、1958、7p
- 7 『共生できない人権意識をこえて』聖教新聞 1998.12.24 日付、7 p
- 8 『国際関係論とは何か—多様化する「場」と「主体」—』高田和夫編、法律文化社、1998、169 p
- 9 『東京大学公開講座 46 異文化への理解』森亘著、東京大学出版会、1988、vi
- 10 前掲 4、11 p
- 11 『金曜フォーラム“日韓地域交流をどうすすめるか”』、NHK 教育 TV、1998
- 12 『音楽の根源にあるもの』小泉文夫著、平凡社、1994、288 p
- 13 『異文化を読む』岡部朗一著、南雲堂、1988、69 p
- 14 前掲 9、vi
- 15 『人生読本』清水勝発行、河出書房、1983、103 p
- 16 『現代の子ども』朝日新聞 1996.10.23 日付朝刊
- 17 『モノグラフ・中学生の世界 vol.61・キレル・むかつく』ベネッセ研究所発行、1998
- 18 『レジャー白書'99 にみる余暇意識』読売新聞 1999.4.28 日付朝刊
- 19 『社説』聖教新聞 1999.1.6 日付
- 20 『コミュニケーション・入門』船津衛著、有斐閣アルマ、1996、36 p
- 21 『佐賀市報 8月号』佐賀市、1999、21 p
- 22 『21世紀は地球っ子の時代—家庭・地域・学校—』榎田勝利著、中央出版、1989、49 p
- 23 前掲 22、56 p
- 24 『NHK英語ビジネスワールド』10月7日放送.1998
- 25 『ろんだん佐賀』佐賀新聞 1999.5.31 日付朝刊
- 26 『植物と話がしたい』神津善行著、講談社、1998、148 p
- 27 『ここまでやるか! 国際交流』教育家庭出版社発行、1997、187 p
- 28 『国際交流 第 66号』国際交流基金発行、1995、13 p
- 29 前掲 28、13 p
- 30 『論壇』朝日新聞、1996.9.4 日付
- 31 前掲書 28、13 p
- 32 前掲 11

第II章 非言語コミュニケーションについて

II-1. コミュニケーションとは

われわれが一般によく言う“コミュニケーション”とは何であろうか。まず言葉から考えてみると、接頭辞「コミュ」はラテン語で<共有の>とか<共通の><公共の>を意味するcommunisに由来している¹。また、コミュニケーションの原義は、キリスト教で信者が神との霊的な交わりを享受することを意味する“神聖な”言葉であるという²。昔の人々は神とのつながりを意識し、それを言葉で表そうとしたのかもしれない。このように、“コミュニケーション”という言葉からは、一人ではなく“共に”という周りとの関係性の面からとらえることができる。

岡部朗一は「コミュニケーションとは、複数形の構成要素が相互に影響し合う継続的過程」³と述べている。この世に生きているものは、互いに影響をしい存在している。情報を交換し合い、また助け合うために、個体にもっているありとあらゆる方法をつかって相手に対して何かを伝えようとし、受けた方もそれを察知し行動をしている。

人間も日々の生活の中で、他に影響を与え他からの影響を受けながら日々生活をしている。J.コンドンは「コミュニケーションは二人以上の人の間に発生するのであって、一人の人が行うものではない」と、人と人との間の関係にある“あらゆる行動”がコミュニケーションの可能性を秘めたものとする考えを述べている⁴。人間は考えをもとに行動し、得た情報から判断してまた行動を起こすが、そのことが他の人に影響を与えていく。この過程から“人間関係”が作られていくが、このようなことから岡部慶三もいうように、コミュニケーションは「人間関係成立の基盤」としてとらえることができる⁵。

人間は、コミュニケーションをし関係を築いていく過程の中でさまざまなメッセージをやり取りしている。W.ヴィーヴァーは「この選ばれたメッセージは、書かれた言葉や話し言葉、図、音楽などから成り立つ」⁶と述べるように、われわれはこれらのさまざまな記号のような“媒体”を通すことによって情報を得ることができる。藤竹暁はこれを“シンボル”と名付けているが、彼は、発信者と受信者がともにその意味を『共有する』ときにシンボルとしての機能を演ずることができるものであることから、そのシンボルは「公共的(public)なものでなければならない」と述べている⁷。また、さらに藤竹は、このシンボルの解読に関して「コミュニケーションの当事者は共通のカギが存在してはじめて、シンボルはその作用を演ずる」という。確かに、伝えたいことが相手に届かなければコミュニケーションはなりたたない、といってもよいだろう。

教室で授業を受けている学生がいる。その学生自身に意図があるかないかを問わず、その態度は教師に何らかのメッセージを伝えている。教師がそれに対して何も見出せなければ

ばコミュニケーションは成立しないが、(眠い) (おもしろそう) (早く終わってくれ) などの意味がその行動に付与されたときにコミュニケーションは成立している、と岡部朗一は述べる⁸。つまり「行動した側(送り手)に意図があろうとなかろうと」それはコミュニケーション的価値をもち、「コミュニケーションは避けられない」⁹というのである。われわれは普段なにげなく無意識に行動をとることもあるが、受け手を中心にして考えたコミュニケーション観から言えば、他者がその行動を知覚し、何らかの解釈をし、“その行動に意味を見出したならば” コミュニケーションが成立したものと考えられるだろう¹⁰。

それでは“何でもコミュニケーションになってしまうではないか” “いったいコミュニケーションとは何だ?” ということになるが、岡部慶三は「コミュニケーションの規定とは、その概念的、抽象的な言葉による定義を必ずしも意味しない」ことを述べている¹¹。つまり、「コミュニケーション現象と呼ばれるものは、たとえば“物体がそこに在る” というような意味でわれわれの前に存在するのではなく、“コミュニケーションとしてみる見方をとるからこそ”それがコミュニケーション現象としてとらえられるのである」¹²というのである。例えば、人に道ですれ違ったときにまったく何も意識されなければコミュニケーションは成立しないが、存在に気付いていれば(目つき)や(動作)などから何らかのメッセージを相手から受け取るかもしれない。このように人は相手から“何らかのメッセージを知覚する”ことで“コミュニケーションを意識している”といってもいいだろう。

M.プロッサーは、このように「いったん他の人と相互関係をもてば、そこにはかならずコミュニケーションが生じる」と述べ、神経系統の指令を受けて、つねに無意識のうちにコミュニケーション行動をおこなって生物としての機能を果たしている、という¹³。他の生き物たちはお互いに助け合って生きているが、それは“野生の本能”からで意思をもっているかどうかはわからない。濱口恵俊は「生物が個体間で行うコミュニケーションの目的は、配偶行動、育児行動および集団生活の維持を円滑にすることにある」¹⁴と述べている。多くの生物が集団を作って生活しているように、人間も他のものとの相互作用が重要な役割を果たしている。岡部朗一が「人間間、国家間、文化間で“触媒”の働きをするのがコミュニケーションであろう」¹⁵と述べているように、異文化の中で円滑な社会を創り出すためにも、コミュニケーションの重要性があるだろう。

II - 2 . 非言語コミュニケーションの 概念、および特徴

II - 2 . 1 言葉では表現できない何か

前項で、コミュニケーションには“目的意識を全く欠いたコミュニケーションもある”ということ述べた。中野収は、都会を離れて田園や自然に接すると心が洗われるような感覚をもつ例をあげて、「自然の景観が、風が、香りが、われわれの感覚に都会のそれとは異なった刺激を与えている」ことを述べている。そして「人は視覚と聴覚と嗅覚と、そして特に感覚の鋭敏な場合は触覚とを動員して自然に接し」、「その感覚が都会と異なる何かを読みとっている」と結論付けている¹⁶。

われわれは、普段“五感”を通していろいろな知覚をしているが、目に見えない力というものが存在することは昔からいわれてきた。A. ストーは著書で次の例をひいてそれを説明する。

『音』は、目に見えない。心も魂も、目に見えない。空気も見えないし、時間も見えることはない。こんなに多くの『目に見えない』大切なものがわたしたちの周りに存在していること、しかしそれらのどれもが、なくてはならないものであり、同時にどのくらいの規模のものなのか計り知れないのだ、ということをもっともっと認識すべきなのではないだろうか。」¹⁷

人間は進化と共に、発達した部分もあるが、退化してしまった能力もあるのではないだろうか。この世界には人間に聞き取れない音や、目に見えない色が存在しているが、そのような音や光も、人間以外の生き物や、あるいはまた何らかの特殊な装置には捉える事ができるようである。例えば<聴覚>は周波数によって聞こえる範囲が異なっている。ヘビやカメ類は 200~700Hz の低周波音によく応答するが、高周波音に対する感度は悪くなる。鳥類の可聴範囲はさらに高周波側に広がり、1万 2000Hz~1万 5000Hz の音までが可聴範囲になるが、哺乳類に比べると狭い。哺乳類の聴覚の可聴範囲は動物のうちで最も広く、一般には可聴範囲（聞こえる範囲）の上限は数千 Hz で、コウモリでは 12 万 Hz、イルカでは 15 万 Hz まで可聴範囲ということである¹⁸。このように、“人間の感覚器官の能力の限界”が、自然界に存在している外界の現象をとらえる際の足かせとなっている。

これらの例は、動物が生まれつきもっている特色の比較ではあるが、深海に住む魚や地中で活動する動物の眼が退化したりする例があるように、生き物は何かの器官が発達すれば使わなくてもよい器官が衰えてくるようである。現代人が、便利で快適な生活を送るようになった半面、失われた機能も多くなっていることは容易に推測されるだろう。

千住真理子は、太古の昔の人間は、今は失ってしまったもっと繊細な能力をもっていたのではないか、ということをおのづかのように述べている。

『言葉』という小道具を身につけてしまった人間は、現代において『思いを伝達する』ということが、いちばん下手になってしまった。人間が、気持ちを伝えようとするとき、言葉は邪魔になってくる。複雑な思いであればあるほど、言葉を使って伝達することは、難しい。」¹⁹

人間が“気持ちを伝える”ときに使うのが言葉である。しかし、言葉は万能であろうか。言葉には細かいいろいろな事象を描写できるという特徴があるが、それによって“言葉には表れないもの”を受け取る感覚が鈍ってきているのではないだろうか。

言葉が通じないと心は通じ合えないのだろうか。次のは佐賀県西有田町で海外からのゲストをホームステイで受け入れた話である。

「ゲストである通訳が一緒でない家庭では、身振り手振り、筆談での会話となった…わずか一週間の滞在ではあったが、そこには時間の長さだけでは計れない、心で通じ合う交流が行われていた。別れ際、ホストファミリーとゲストが共に涙を流しながら再会を誓う場面が、そのことを物語っていた」²⁰

この話からいえることは、両者の間に「言葉」では言い表されない“何か”がお互いに共有された」ということではないだろうか。そこで次には言葉で表されないコミュニケーション（非言語コミュニケーション）について考えてみる。

II - 2. 2 非言語コミュニケーションとは

コミュニケーションを展開するためには、一般的に、メッセージの送り手が考えや感情を言語その他の記号体系に記号化するのだが、同時に各種の言葉では表せない“非言語メッセージ”を用いるといわれている²¹。この非言語メッセージを大別してみよう。

<視覚>を使ったものでは、アイコン（図像）をつかうことによって意味を示すことができる。道路標識などがその例であろう。そのほか村山貞也が「色は、快・不快とか好き嫌いとかの感情をひきおこすだけでなく、一定の意味を伝えるメッセージでもある」²²と述べているように、色によっても情報が伝わることは、赤は“危険”、黄色は“注意”、青は“OK”の例などでもわかる。また、われわれが一般的に「人の顔を見て判断する」ように“表情”や“しぐさ”というものが、さまざまな情報を読み取るための手助けとなっている。

<触覚>については、握手をしたり抱擁をするときなど、その感触で相手の真意がわかる場合もあるだろう。盲人が触れて情報を得ること（点字や彫刻の観察）などは<触覚>が重要とされるその一例といえるだろう。ヘレン・ケラーが“Water”の意味する言葉を“水に触れる”ことから得ることができたことは有名な話である。

<嗅覚>や<味覚>についても、重要な要素をもっている。この感覚がなければ、われわれは腐ったものを平気で食べたり、有毒ガスのあるところに近づくことになりかねない。生き物は、この<嗅覚><味覚>によっても危険を察知したりする。

そして、この論文で取り上げる<聴覚>であるが、詳しくは後段で詳しく述べることにするが、われわれは音のさまざまな変化（高低・長短・大小）によって情報を得ることによってさまざまな恩恵をうけることができる。<触覚>と同様、盲人が健常者に比べて、<聴覚>においてすぐれていることは、普段われわれが気づかないことでも発見すること

ができるようである。宮城道雄は教え子のお稽古の時間に、演奏を聴いて「何か悩みがあるのか」と教え子の精神状態の乱れを指摘した²³。声の微妙な響きによって精神の状態を見分けることができるのはわれわれでもよくやることである。盲目のエレクトーン奏者大島は、小さい頃、彼が姉につきあいアサガオの観察をした時、花がはじける音に気がつき、姉がその発見に驚嘆したことを述べている²⁴。

これらはわれわれの五感で感じられる非言語のコミュニケーションであるが、この他にもわれわれの感覚ではとらえられない部分でもコミュニケーションが行われている可能性は十分に考えられる。

II - 2. 3 非言語コミュニケーションの特徴

ここで、これら<非言語メッセージ>を使うコミュニケーションの特徴について、考えておきたい。小池浩子は次の四点をその特徴として挙げている²⁵。

- ① マルチチャンネル性
- ② 直接伝達性（意識的せずに記号化、解読しやすい）
- ③ あいまいさ
- ④ ユニバーサルなものもあれば文化特有のものも多い

①の“マルチチャンネル性”とは、「いろいろな要素との関連がある」ということであり、その情報だけが単独で伝わるということの意味しない。音楽の分野での“オペラ”や“ミュージカル”などはこれを最大限に活用した芸術であろう。

②の“直接伝達性”は、直接相手に伝わるということの意味している。難しいことを考えなくとも、相手の心、感性に直接届く可能性があることを意味している。

③の“あいまいさ”については、“詳しい意味を伝えにくく、理解しにくい”ということ、言語と違い具体性に欠け、時には解釈の場面で誤解を与える場合もあることである。

④“ユニバーサルなものもあれば文化特有のものも多い”とは、異文化に対してそれが共通する（共有される）部分もあれば、その文化にしか見られないこともある、ということである。

このようなく非言語メッセージを使ったコミュニケーションについて、その特徴のよい点、補わなければならない点をしっかり認識した上で、効果的に活用していくことが求められるであろう。

われわれが人と応対するときには、本人が意識する、しないにかかわらず無意識的な行動をしがちである。岡部朗一は、言語（バーバル）は“常に人をだます可能性がある意識行動である”のに対し、非言語行動（ノンバーバル）は“無意識行動、計算されない本音”であると、**「バーバル以上にノンバーバルを通してある感情を表す時には、その感情表出**

を支援するように、体の他の部分も同時に行動を起こすのが普通である」と述べている。²⁶

このように言葉以外から得られるメッセージには“本音”の部分が現れることがあるのだろう。芸術について語るときに、とにかく言葉ではその感動なり、印象を言葉に表すのは難しいものがある。武満徹は、科学者や哲学者が“言葉を一定の意味と内容を入れる器として、きわめて限定的に考えようとする”のに対し、芸術家は“言葉をもっと動的な、変化しつづける状態として捉えようとする”特徴があることを述べている。つまり、彼は「芸術家すなわち文学者、音楽家、画家たちは、哲学者や科学者ほどには言葉を信頼していないようにみえます。」²⁷と、芸術を言葉で語ろうとすることの曖昧さを指摘している。非言語の媒体である音楽は、言葉にはあらわれなくとも「無意識に“本音”が現れている可能性がある」といえるだろう。

II - 2 . 4 その他の特徴

その他には、二人の人間がコミュニケーションしていると、いつのまにか無意識に身体の動きや声などのリズムが同調して似通ってくる“シンクロナイゼーション（同調）”ということがある。親や教師の子どもの話し方や癖が似たり、恋人同士が似て来たり、本人が意識していなくてもそういうことを見聞きする。つまり、相手の非言語行動の情報が何らかの形でもう一方に影響を与えているのだろう。反面教師的にとらえて「ああいう風には自分にはなるまい」と思っている、知らず知らずの内に同じ行動をとっていることに気づくこともあるのではないだろうか。

また、非言語コミュニケーションが相手への心理的距離を示すこともあげられる。相手に好意をもっていると、対人関係が親密になり、身体や顔が相手のほうを向き、前かがみになり、もっと見つめるようになり、スマイルやうなずきなど、相手に好意的な反応が多くなり、ジェスチャーや接触が多くなる²⁸。その反面、否定的に見たり、不快に思っている場合には、隠そうと思っても表情やしぐさ、話し方などに現れてしまうことがある。日本人はその点、相手の反応を見ながら自分の行為を反省し、相手の気持ちを推し量ったりする習慣が普段から身につけているため、「沈黙は金」などという諺が通用するのではないだろうか。

II - 2 . 5 異文化との非言語コミュニケーション

以上述べたように、われわれは言葉以外にもさまざまな感覚から受け取れる情報を駆使して物事を判断しているが、自分たちの価値の範疇に収まらないものについては排除することもある。前に述べた“同質性”にも当てはまるが、世界中の民族・宗教などの対立は、

異質の文化・価値を認めることなく一方的な見方によって他を見ているからに違いない。この問題について、小池は示唆に富むことを述べている。

「一人の人間を見たときに、民族カテゴリーと性別カテゴリーのみを使って『黒人男性』とだけ認識し、その人の他の特徴には構わなかったとする。このようなケースは、使用しているカテゴリーの数が少ないので認知的複雑性が低い、あるいは認知的に単純だということができる。同じ人を年齢、職業、性別、背の高さ、髪の色、服装、持ち物、正直かどうか、話がおもしろいかどうか、聞き上手かどうか等々、より多くのカテゴリーで認知した場合は、認知的複雑性が高い、あるいは認知的に複雑だということができる。

認知的に複雑な人は、他の人の印象をより詳しくつかむことができる。また、人の行動を予測する能力も高いことが分かっている。」²⁹

われわれが一人の人間と接する際に、少し付き合っただけで「この人はこういう人だ」と簡単に判断してしまうことは日常的なことである。ましてや、異文化で生まれ育ったものをみるときは、自分の育った文化の観点からとらえ、偏った判断をしがちである。ここでは、一面から見た“ステレオ・タイプ”的な見方を改めるべく、多方面からその人物なりを判断することが必要である、ということであるが、一個人のみならず、ある団体や、社会に対してもこのことは当てはまるであろう。

スリランカ出身のカセム・モンテ氏は「地球っ子とは、自分の所属しているグループとか狭い範囲のことから自分の枠を超えた場所や人々（外国とか外国人とは限らない）を理解できることが必要である。」³⁰と述べているが、まさにこういう理解をしている、また、しようとしている努力している人が少なくとも文化摩擦を最小限に回避しているのであろう。また、岡部朗一も「他者との交渉、交流とは、コミュニケーション行動を通して、われわれは自分のものの見方、知覚を決定し、時には自分自身のそれまで保持してきた枠を超えて、交流相手の個人領域にまで入ってその世界観を共有することである³¹。」と、自分の価値観・思考の枠を超えて共有することの必要性を述べている。

ここで、非言語コミュニケーションを通じた交流の例をあげてみよう。名古屋で鉄工所を経営する一壮年は、民芸品店でひとときわ輝いた彫刻を見た時から、同じものが全くないアフリカ（タンザニア）のマコンデ彫刻の無限の魅力にとりつかれてしまった。われわれにはない異文化の特徴に惹かれた彼はアフリカの人々との交流を続け、とうとう5年がかりで鉄工所の隣接地に、手作りの美術館を作り、タンザニアの芸術を紹介する活動をしている³²。

そして、もう一つは、名古屋で行われた「エルダーホステル日本語講座」のセミナーのようすである。アメリカ・カナダの高齢者25人が一週間、名古屋国際センターを訪れたが、その時の彼等に触れた日本人の感想は次のようなものであった。

「エルダーの人たちと交わる中で驚いたことは、彼らは本当に明るくて若々しい。そして

何事にも好奇心旺盛で活動的であるということである。」³³

彼らのバイタリティあふれる人間性、また表現豊かな国民性が異国のわれわれには驚きとなって映っているのかもしれない。一方、日本に来訪した高齢者からは「見知らぬ文化や人々との出会いが人生を豊かにする」、また「毎日が新しい興味と興奮の連続です」と、新しい文化とのふれあいにより新鮮な感動があり、それによって生き生きとした生命の触発が行われていることが報告されている。異文化に触れることが、このように日々新たな経験と捉えられ、いつまでも若々しくいられることはすばらしいことである。

言葉を介さないコミュニケーションでも、このように人の心を動かすことはできるのである。

II - 3 . 音でコミュニケーションできる 可能性

前節で述べたように、コミュニケーションは言葉でのコミュニケーションの他に、言葉を使わない（非言語）コミュニケーションも存在することがわかったが、ここではその中の“音”にスポットを当てて、コミュニケーションとしての役割と可能性を考えてみる。

II - 3 . 1 人類に共通する音

アメリカ IBM 研究所のボス氏が興味深い研究をしている。アメリカでクラシック音楽を専門に放送している放送局の放送を 12 時間録音してそのスペクトルを求めたところ、非常になめらかな $1/f$ のゆらぎ³⁴が見られたという。この $1/f$ のゆらぎのリズムをもつ音は、「意外性」と「期待性」とが拮抗していて、過度な緊張感があり爽やかである、との報告がされている。自然界のなかにはこのリズムがたくさん存在するそうであるが、人間の脳はこの $1/f$ のリズムの刺激を受けると共鳴し、同じように $1/f$ リズムになるそうである³⁵。

われわれが音を聞いたときに「快い」と感じるか「不快」と感じるかは、このことが関わってくるのではないだろうか。

数年前から話題になった「森林浴」は、都会の雑踏の生活に疲れた人々の心と体を癒す健康法で、その効果は、嗅覚や視覚から得られる自然のエネルギーによるものもあろうが、耳から得られる感覚からも効果があるのではないだろうか。ニュージーランド、カナダ、ジャマイカ、スイスに住む人々を対象に、音の選好度を調査したところ、小川のせせらぎ、川の流れる音、滝の音については、誰も不快を示さなかったばかりか、ほとんどの人々が心地よく感じた、という結果が得られている³⁶。また、反対に、白墨や爪でスレート

の上をキューツと引っかく音は、万国共通のいやな音であるという³⁷。つまり、このことから、音の刺激には人類に共通する感覚がある、ということがいえるだろう。

II - 3. 2 自然界での音を使ったコミュニケーション

人間に限らず、生あるものは“音”を使ってその存在を他に伝えようとすることがある。“メクラネズミ”は他から来るライバルと出合わないようあらゆる努力をするが、目の見えない彼らはトンネルを掘り続け、土を叩いて縄張りを主張している。また、“ヒバリ”も縄張りを主張するために甲高くさえずるが、他の鳥におそわれている時でもその鳴き声は止むことがない。なぜなら鳴かないのは弱いものとして外敵に判断されるため襲われやすいからである。“ヤシオウム”という鳥は、鳴き声の他に折った小枝をドラムスティックのように打ち鳴らして縄張りを知らせる手段をとっている。

同じ種の動物だけでなく、他の動物からも音によるコミュニケーションを捉えている例がある。ツキノワテリムクドリという小鳥は鷲の襲撃を恐れているが、サバンナテリモンキーという猿にとっても同じである。ツキノワテリムクドリが「地上は危険」と知らせ、サバンナモンキーはそれを自分たちの言葉を使って繰り返し、全員が急いで逃げるといふ³⁸。

以上は“縄張りを示したり、危険を感じたときの例”であるが、他にも有名なものが、動物たちの求婚行動の中から見られるコミュニケーションが挙げられるだろう。

サンフランシスコ湾では、“ポリクチス”という魚の雄は浮き袋を震わせて音を出しているが、これは何匹ものメスが歌を気に入ったオスの巣に次々と卵を生むため、雄はまた、子供が入っている古いアワビの貝殻を守っている。また、“ヨツボシクサカゲロウ”という虫は身体を震わせて茎や葉の根本に振動を送っているが、それは、カゲロウの種類によって発生する振動数とリズムが違うため、彼らはこの違いによってパートナーとなる雄や雌を認識するという³⁹。

これらは特殊な例かもしれないが、身近なところで“鳥”を例にとってみても、その鳴き声は多くの異なった機能をもっているようである。鳴いている鳥の居場所からテリトリーがわかったり、敵への警告としての役割も果たすということがあり、また、配偶者を探している鳥は、すでにつがいになっている鳥よりも力強く歌うという⁴⁰。この例に挙げられるように、われわれのまわりでは鉱物・植物・動物その他諸々の事物がさまざまな音を発しているが、これらの音はひとたび人間の耳に達すれば“なんらかの意味を伝えるもの”として知覚される。大阪大学の山口修はその例を次のように述べている

「たとえば、生命の維持に必要な水や動物のありかを知らせる信号としての音の意味を聴きとることがあるだろう。また、快いもの、あるいは不快なものとして音を感じとった結果、鮮明なイメージが脳裏に刻印されることもある。さらに、神秘的な力で畏敬の念を

起こさせたり、軽快なリズムをかなでることによって生理反応をくすぐる音もあろう。環境音をこのようにしてさまざまに受けとめることこそが、『音の文化』を形成する上での基礎となっているにちがいない。」⁴¹

ここで述べられている例のように、われわれがそれを何らかのメッセージとして受けとめるかどうかで、その音は意味のあるものになる。われわれは、自然の出すメッセージに（たとえそれが意図的なものでなかったとしても）もっと耳を傾ける必要があるのではないだろうか。

イルカは頭のよいことで知られるが、そのコミュニケーションの形態は少しずつ解明されつつある。彼らは、大きく分けて「人間に聞こえる音」「人間には聞こえない超音波」「音の意味を変える姿勢」「接触による方法」の“4つの方法”でコミュニケーションしているという⁴²。このために、イルカは他のどんな動物も及ばないほど複雑なコミュニケーション網を持っている、ということであるが、今後科学が発達するにつれて、人間の感覚では計り知れないほどの、音を使ったコミュニケーションの形態も考えられてくるのではないだろうか。

II - 3. 3 声をつかう人類

私たちが日常の生活の中で歌ったり語ったり泣いたり笑ったりして相手とのコミュニケーションを可能にしているのは、「声を出す」という行為が元になっている。声は、私たちの周囲に当たり前存在するため、その重要性は気づかれにくい、この世界がまさに声に満ち溢れ、私たちにとって根源的なかわりを持つものであろうということは、「産声」や「断末魔の悲鳴」などを例にとってもわかるであろう⁴³。山口修は、音文化を形成するために不可欠なあらゆる素材のなかでもっとも大切なのは“声”であるとして次のようにのべている。

「…それ(声)は、身体を維持する『息』をエネルギー源とし、しかも身体の一部としての声帯が発音体であるのみならず、身体のなかに潜む口腔や鼻腔が共鳴室の役割をになっているからであろう。すなわち、『生き』につながる『息』の働きが、声という、さらに実体感のある音響現象を引き起こすのである。」⁴⁴

“生きている”という生命活動の表れとして「声」を判断材料にするということはよくあることだ。日々顔を突き合わせている夫婦や親しい友達の間などでは、“声を聞いただけでその日の調子を察する”ということがある。人間は、知らず知らずのうちに声を張り上げてしまったりする場面があるし、私はこう思っているのだ、それをわかってほしいという気持ちをいだいているのだということをほとんど意識しなくても、心の中に抱いている

深い悲しみがにじみ出てくるような調子で話したりすることがある⁴⁵。意識する、しないにかかわらず、われわれの音声活動には何らかのメッセージが含まれていることが多い。

さて、先でも例を挙げたように、動物も自分のできうる限りの能力を使って“音でのコミュニケーション”をしようとしている、ということがわかった。そしてさらに動物から進化した人類は、声を出すという行動「発声」を通して、少しずつ進化しつつあったコミュニケーション文明を大きく推進することになった。甲高くキーキーと騒ぐ音、低くウーッとうなる音、短くアッと発する音……人間は自分の発声する「音」にいろいろな意味をつけはじめ⁴⁶、意思すなわち考えや感情を言語記号化して相手に伝達する方法でメッセージを送ることを覚えていったわけであるが⁴⁷、言語がまだはっきりと確立していないころの言葉には、その“音のニュアンス（感じ）”から意味が推察されるものがあっただろう。

言葉を例にとると、単語の中には“苦心して口を動かし、物事を口で表現し始めたときの痕跡”から、単語の約7～10%は「実際の音を模して作られた」という。例えば、“whi”という音から以下のような意味の単語がある⁴⁸。

・whirl whistle whisper whir whip whiffle whiff whine whiz

これらは「風のように空気を切る音」「空気の摩擦音」を連想させるものばかりであり、違う言葉を話すわれわれでも、その意味するところのニュアンスが感じられるだろう。また、以下は「きら（ギラ）めきを表す」言葉である。

・gleam glimmer glare glitter glisten glow glass glad glory

これらの単語が示すものは、言葉の意味を知らなくてもその表現するものが“音の感じ”からわかる、つまり「意味をいちいち説明しなくとも異文化の人でも類推することができる」ということである。言葉の発達段階では、このように“音”が表現したいことを表していた未分化の状態が大きかったことだろう。

言葉が発達し、その意味が細分化し、「言葉で何でも伝えることができる」という思いこみをしているわれわれは、今一度、この“音”のもつ表現性に学ぶべきではないだろうか。表現したいものが言葉でうまく伝えることができない場合、“うめき”でも“叫び”でもあげたくなるのが自然であろう。A. ストーは、人間がコミュニケーションをしていくときに必ずしも“言葉”だけを使うわけではないことを次のように述べている。

「さらに、大人同士の関わりには通常言葉のやりとりがつきものであるにもかかわらず、つねにそうしているわけでもない。同じ言語を話せない人々とも関係を築くことができるし、最も親密な身体的関係では、通常言葉を使いはずするものの、必ずしもその必要はないのだ。身体的親密さというのは言葉に表わすことができないものであり、言葉で表わせるどんなものより深いものだと考えている人が圧倒的に多いのである。」⁴⁹

人々のコミュニケーションの中には、言葉が指示する意味だけでは推し量れない“表現したいこと”がきっとあるに違いない。“音”はわれわれが言葉で理解することができないような内容についても、その感覚から何かをつかむことができる可能性を秘めている、ということがいえるのではないだろうか。

<注>

- 1 『世界大百科事典』CD-ROM、日立デジタル平凡社、1998
- 2 『異文化を読む』岡部朗一著、南雲堂、1988、18 p
- 3 『異文化コミュニケーション』岡部朗一監修、有斐閣、1996、68 p
- 4 『異文化間コミュニケーション』J.コンドン著、近藤千恵訳、サイマル出版会、1980、16 p
- 5 『現代社会とコミュニケーション第1巻;基礎理論』内川芳美・岡部慶三・竹内郁郎・辻村明編、東京大学出版会、1973、8 p
- 6 『コミュニケーションの数学的理論—情報理論の基礎—』C.E.シャノ・W.グアイヴァー著、長谷川淳・井上光洋訳、明治図書、1969、46 p
- 7 前掲5、140 p
- 8 前掲2、43 p
- 9 前掲3、34 p
- 10 『異文化トレーニング—ボーダレス社会を生きる』八代京子。町恵理子、小池浩子、磯貝友子共著、三修社、1998、58 p
- 11 前掲5、15 p
- 12 前掲5、9 p
- 13 『異文化とコミュニケーション』マイケル・H・プロッサ著、岡部朗一訳、東海大学出版会、1982、4 p
- 14 『国際化と情報化』濱口恵俊編著、日本放送出版協会、1992、128 p
- 15 前掲2、68 p
- 16 『コミュニケーションの記号論』中野収著、有斐閣、1984、108 p
- 17 『音楽する精神』アンソニー・ストー著、佐藤由紀・大沢忠雄・黒川孝文訳、白揚社、1994、202 p
- 18 『世界大百科事典』日立デジタル平凡社、1998
- 19 『生命が音になるとき』千住真理子著、オーム社、1995、30 p
- 20 『田植歌アジアフェスティバル10周年記念誌』西有田町役場、1997、14 p
- 21 前掲2、157 p
- 22 『人はなぜ色にこだわるか』村山貞也著、KKベストセラーズ、1996、25 p
- 23 『知ってるつもり』日本テレビ、1996.8.1放送
- 24 『心の月は沈まない』大島彰著、河出書房新社、1995
- 25 前掲10、152 p
- 26 前掲2、157 p
- 27 『人生読本』清水勝発行、河出書房、1983、52 p
- 28 前掲10、152 p
- 29 前掲10、210 p
- 30 『21世紀は地球っ子の時代』榎田勝利著、中央出版、1989、157 p
- 31 前掲2、59 p
- 32 前掲30、140 p
- 33 前掲30、150 p
- 34 ある量が平均値の上下に不規則に変化することを“ゆらぎ”というが、この不規則さにも種類があり、“ゆっくりした変化”から、一寸先はわからない“ランダムな変化”まであり、その中間に“1/f ゆらぎ”とよばれるものがある。電子工学分野で発見されたものだが、脈拍の時間変化など身近な例も多い。元東工大の武者利光によれば、“1/f ゆらぎ”は意外性と期待性を適度に含み人に快い感じを与えるので、この型の不規則性を扇風機の風力など、家電製品に取り入れる試みもされている；『現代用語の基礎知識1999 CD-ROM版』自由国民社発行、1998
- 35 『θ波 リラクゼーションのための眠りの音楽』CD、アポロン、APCE-5167、1991
- 36 前掲17、14p
- 37 前掲17、302p
- 38 『野生の驚異～意思の伝達』ビデオ、ほるぷ出版（タイムライフ ビデオ配給）.1991
- 39 前掲38

II 非言語コミュニケーションについて

- 40 前掲 36、16p
41 『比較文化論 異文化の理解』山口修・斎藤和枝編、世界思想社、1995、81p
42 前掲 38
43 『音の力』DeMusic Inter 編、インパクト出版会、1996、181p
44 前掲 41、83p
45 前掲 17、228p
46 『メディア・ワールド④音楽と音響』スタジオ・ハード・インコーポレーテッド編著、リブリオ出版、1985、2p
47 前掲 3、83p
48 『NHK英語ビジネスワールド3月号』、日本放送出版協会、1999.3.31 放送、66p
49 前掲 17、23p

第Ⅲ章 コミュニケーションとしての音楽の特徴

<音を素材にした芸術形態—音楽>

人間は創造する生き物である。そして、その人間が『音』のもつ効果をうまく利用して表現を発展させてきたのが“音楽”という芸術である。

ある音が“音楽”であるか、ただの“雑音”であるかを判別するとき、「“雑音”はただ偶然に生じるだけで人間が操作したものではないのに対し、“音楽”は素材を計画的に使った結果できあがったものである」という説がある¹。つまり、音楽は「人間が何かを表現しようとするために、適切な音を選ぶ試行錯誤の結果できあがった」というのである。

他の生き物よりも知的な思考ができる人間は、『音』を意識して使うことによって“言葉”を獲得したのと同じように“音楽”を意識し創り出してきた。小川博司は、ただ単に『音』が選ばれたわけではなくそこに“価値”を見出されたから音楽が成立した、と述べている²。単調な拍を刻むリズムも、それを音楽の構成要素となる価値として意識されれば“音楽”になりうる。アンダーソンはタイプライターの刻む音を価値に見出し“音楽”にした。そのように考えれば私たちの周りには“音楽”の材料として使えるものは無数にあるだろう。

芸術家は自分の表現したいことをある素材を使って表そうとするが、その素材には表現形式を作り出すための特有の要素がある。音楽は“音”を素材とした芸術であるため、音楽家たちはその特徴を活かして、聴衆にも共有される“何か”を表現しようとしているであろう。それでは“音楽”の素材となるものにはどのような特徴があるのだろうか、その要素から見ていくことにする。

Ⅲ — 1 . 音楽を構成する要素

Ⅲ — 1 . 1 音楽の中のリズム

芸術が対象とする感覚は時間と空間によって規定されている。空間の中に存在するものは絵画、彫刻、建築、工芸などの「造形芸術」と呼ばれるもので、時間とは直接関係がない。たしかに、1枚の絵にも“動きを感じる”というところさえもできるが、絵や写真は基本的に“静止したもの”である。これに反して音楽は時間の中に展開され、それ自体空間をもたないので「時間芸術」と呼ばれている³。わかりやすい例でいうならば、「絵

に描かれた波」は、いつ見ても力を込めて高く盛り上がったままで時間が止まっているのに対し、「本物の波の音」は、じきにぐだけて散り、一度限りで二度と同じには聞こえない。その一方「作り出した音」は、演奏するオーケストラがあって、それを聴く聴衆がいる限り何回でも繰り返すことができる、という違いをもって説明ができる⁴。

芸術はよく「生命をあらわしたもの」としてとらえられる。つまり、「芸術家が“魂”から表現をしよう」としたものに触れ、われわれは感動している。“時間を自覚する”ということは、つまり“生きている”ということの自覚であり、そうであるがために「生の躍動」といったものも「時間芸術」である音楽をもって表現ができるのであろう。音楽から“時間”の要素をとったらそこは“死”といえるのではないだろうか。

さて、それでは音楽の中でこの“時間”を意識させるものは何であろうか。「リズムなくして、音楽は存在しえないだろう。これに対して、旋律も和声ももたないような音楽は、数多くある」⁵といわれるように、世界のあらゆる文化の音楽の中で、最も基礎的なものとして浮かび上がるのは“リズム”である。E.ハンスリックも「自然のすべてではないが、そのうちの多くの音響は律動的である」⁶と述べている。

神津善行は植物の発信電波を聞いたときに、それぞれの葉が出す音の間隔などが、奇妙に統一性を保ちながら大きなリズムの繰り返しと、不規則でありながら統一性のある間隔を持ったリズムがあることに気が付いている。神津によると、植物界のみならず、自然界はある一定の分割比率（“黄金分割⁷と呼んでいる”）をもって様々な行動や生長を成し遂げており、その比率によって構成されたリズムは、短時間では不統一に聞こえるが長時間かけて聞くと奇妙な統一性をもって聞こえる⁸、ということである。

地球の自転による一日、月のめぐりによる潮の満ち干、月の満ち欠け、公転の一年、四季のうつりかわり、日の出と日の入り等々、この自然界に存在するリズムの不思議さに人々は驚き、そこに崇高さ、偉大さを感じ、“神”の存在までも意識してきたのであろう。「自然の中に神が宿っている」と考える自然崇拜的な考えのもとに、神秘的な儀式などに“音を使う”ことが行われたことは想像に難くない。彼等は、自然を表す場合に自然のもつ“生命の律動・リズム”というものを音楽を使って表そうとしたのかもしれない。

周りの自然のみならず、われわれの体内にも基本的な“拍”に支えられたリズムが脈打っていることは事実である。そういった意味ではわれわれはこの世に生まれた時からリズム的な存在である、ということがいえるだろう。笈三智子は、赤ん坊がリズムを習得していく過程について次のように述べている。

「生後間もない赤ちゃんが、突然の物音におどろいて、反射的な泣き声をあげる場合には、そこにはリズムの流れはありません。しかし、しだいにそれが生活本能と結びついて、身体欲求のための泣き声にかわっていくころには、当然身体のリズムに支えられた泣き声のリズムができていきます。（中略）泣き声で感じた唇の動きの快感と発声のおもしろさも、それを繰り返すうちに、しだいに一定のリズムが流れていくのです。（中略）しかもここで

見落してならないことは、目に見える口唇の運動や耳に聞こえるかわいい声の流れの背後にある、大きくもすばらしい感情の発達です。それは直接的な快・不快感に端を発しながら、しだいに喜びや淋しさや怒り等々、その内容をゆたかにしていきます」⁹

この例からも、赤ん坊は泣き声を発する段階で、リズムの流れに支えられながらその中に感情の発達を交え、次第に言葉として分化していくことが伺える。つまり、リズムをとらえることは世界中の人々が小さい頃から経験していることと言えるだろう。よく、アフリカの音楽を聴いて「人間の魂を感じる」とか、「生命力があり、大地のパワーを感じる」¹⁰といった感想を耳にするが、“リズム”には、生まれてからそれを体感してきた人間の感覚に“直接響く”という特徴があるのではないだろうか。

リズムの違いによって聞く人を刺激的にさせたり、鎮性的にさせたりするということはあるようだ。「衝撃的な音響により特徴づけられるリズムの曲（行進曲、ダンス音楽など）」は筋肉運動を刺激する」が、その一方、「“持続され、レガートで、最小限のリズム運動しかもたないリズムの曲（子守唄など）”は、行動を鎮静し、穏やかにし、静める特徴がある」¹¹という。聴いている環境によってリズムの違う BGM を使い分けるとするのはその影響であろう。

このように、リズムが人間の感覚に直接作用し、“動いている（生きている）時間の感覚”を認識するからこそ、人は音楽に共感するのだろう。

Ⅲ－１．２ 音の高低

前項では、リズムは自然の中や、われわれの身の回りにも見られるということを見てきたが、その他の音楽の要素についてはどうだろうか。E.ハンスリックが、「自然に於いては律動は旋律も和声をも伴わず、ただ測定しにくい空気の振動があるだけにすぎないが、音楽では孤立した律動というものは決してなく、ただ律動に乗って現れる旋律と和声とが存在する」¹²と述べているように、人間の作り出した音楽にはリズムに乗った“音程”を伴い、その音の高低が“旋律”を作り出している。

神津善行は、「一つの音の高さだけでは、意味は通じるが感情はつたわらない」と述べている¹³。演劇の台本を役者が最初に読み合わせをするときに、初めは“素読み”といって感情を入れない読み方では音の高低の幅がわずかであるが、相手を前にしてこの言葉をいうときには、自分の役柄である気持ちをつたえようとするので感情が入り高低の幅が広がる。つまり、相手に気持ちを伝えようとする感情が、音の高低で表現されているのである。

赤ん坊が音を意識して使うようになっていく過程において、“高低の感覚”を身に付けていることは、次の引用にみることができる。

「一歳あるいは十五ヵ月ぐらいの子供が、まず最初に発するメロディーのような断片には、まだはっきり音楽といえるものはない。その揺れ動くパターンは、非常に狭い音程あるいは音域を上下し、ある高さの音を出しているというよりも波のうねりを思わせる。実は、ほとんど文字どおりの一大飛躍が一歳半ごろに起こる。子供はそこで初めて、意識的に不連続な高さの音を発声することができるようになるのだ。それはちょうど、めりはりのある言葉がしまりのない喃語に取って代わるようなものである。」¹⁴

母親から“言語”を獲得していく際に、リズムとともに感情の表現を獲得していくことは前段(Ⅲ-1.1)でも述べたが、そこでは感情を表現する際の重要な要素である音の“高さ”や“大きさ”などを使い分けることも一緒に学んでいくことだろう。いうまでもなく音程の変化は言葉の表現する内容に重大な意味を付加している。伊能美智子も、一つの言葉の“微妙な音程の変化”によってさまざまなニュアンスや多くの意味が生まれることを次のように述べている。

「たとえば“あい”という言葉を取り上げてみましょうか。発音の際の微妙な音程の差から、愛、藍、合、会、哀…など、数多くの意味を伝えることができますし、また、“ええ”という言葉が、ものの言い方次第で肯定になったり、否定になったりするのもよく知られています。」¹⁵

このように、日本語は(日本語だけとは限らないが)言葉のニュアンスによって意味が変化をし、日常生活で相手の気持ちを読み取る訓練を受けている日本人は、少ない言葉の表現でも相手の気持ちなどを察することに敏感なのだろう。

それでは、“音の高さの特徴”はどんなものであろうか。神津によれば「自分が相手より一歩後に引き下がろうとする気持ちのときは低い声を使い、また、自分が相手より前に一歩出ようとする気持ちのときは相手より少しでも高い声を使う、というのが一般的ではないか」ということである¹⁶。言葉を使って何かを伝える場合に、この“音の高低(抑揚)”を使うことが効果的であることは昔からあったようである。マクルーハンが、「詩人は長年にわたり、魔術的な音響的強調によって、視覚イメージをよびおこし、言葉をマジナイとして使ってきた。文字を知らなかった時代の人間は、そこにはないもの呼び起こすこの聴覚の力を知っていた。」¹⁷と述べているように、詩人はただ単に言葉を使うのではなく、この音のもつ効果をねらっているようである。われわれも講談師や落語家の話しているときの“音の高さ”を聞いていると、恐ろしい出来事を話す時や天にも上るような気持ちの時など、その抑揚のもつ効果をうまく使っていることがよくわかる。

山口修も「言語が日常語とはやや異なる詩歌などの文芸として操作されると、メッセージ性は、曖昧ななかにもかえって心に訴える力を増大する。まして、旋律やリズムをとまなつて朗唱されたり歌われたりすれば、さらに幅の広いメッセージ性が獲得されるのである。」¹⁸と、音の高低(抑揚)が言葉のもつメッセージ性を大きくする効果を述べている。

われわれが意識せずに声を発するときでも、嬉しいときには“明るく高めの音”になり、怖いときは“低めで押し殺した響き”を発し、悲しいときには“慟哭する”ように、大なり小なりその折々の心情が音の高低に表れる。このようなことから、音楽の高低は、“人間の感情”などの表現を表す重要な要素の一つである、ということがいえるだろう。

Ⅲ－１．３ 和音

音の高低の他に音楽にとって欠かせない要素は“和音”である。作曲家は和音のもつ表現力を生かし音楽を作っていくが、小林秀雄はワーグナーが歌劇を作曲する際の例を取り上げて、次のように述べている。

「ある伝説を素材として、いかなる思想を表現しようかという彼の企画も、まず基本和声が見れ、それが展開し、動揺し、不安定な状態に入り、最後に、和声は平衡を取り戻さなければならぬという、和声音楽の構造の必然性に左右されるのであります。」¹⁹

彼は“和声の運動があってこそ物語が劇的な動きと感じられるに至った”とも述べているが、このように和声の動きには何らかの必然性があるようである。地方によっては西洋的な和声をとらないところもあるが、それぞれの民族がもつ文化の音楽に対する経験が、「旋律、和音はこのように進む」という“旋律的・和声的な期待感”を形づくっていく。つまり、聴衆はある様式で作られた音楽を聴く時に、“暗示していると思われる旋律の動きの変化”や“和音の変化”を期待し、一方、音楽家は和音の中でその『不安定さ』（偽終止）が『解決』（終止）に向かうように、このような表現性を作り出すために用いられている音楽上の工夫を意識的に見分けている²⁰。

このような和音構造や音楽の様式について知ることは、音楽を聴く楽しみ、また、演奏する楽しみをさらに増すものになるだろう。音楽評論家の吉田秀和は述べている。

「その時、きくものは、形式のことなんか知らなかったって、ある感銘をうけはしますが、やっぱり知ってる方がもっとよくきける。つまり、もっと細かくきける。さもないと、何か次々と波のよせてくるように非常にさかんな感じとか何とかいう風に大ざっぱな感じはうけることができても、その波のよせ具合や、波のよせる力強さや、いろいろなことをききのがしてしまうんじゃないかと思う。（中略）たとえば一度出て来た旋律を覚えていて、それがまた出てくる時に、どんな風にして再現するかということを見分けられるという力をもっていることも、ずいぶんと、音楽をきく楽しみを豊かにしてくれるのです。」²¹

ジャズのミュージシャンはそのコードの進行を感じ取りながら即興で演奏をしていくわけであるが、和音構造をまったく知らなかったとしたらジャズの醍醐味であるアドリブができず、ジャズの面白さはわからないだろう。西洋音楽の和音に限らず、世界にはさまざま

まな音楽の中に独特の“和音”のようなものがある。直接聴くことによって音楽を感じることはもちろん必要なことである。ただ、吉田の言うように、音楽の様式などについて多少の理解をもつことによって、漠然とではなくその曲の細部にまで鑑賞を楽しむことができるということが言えるだろう。

Ⅲ－２．音楽で伝えられるものとは

Ⅲ－２．１ 洞察の共有

一般のコミュニケーションで起こる「伝達の過程」について考えてみよう。通常、まず伝達者は何を伝えるべきか“その内容”を明確にしなければならない。そして、その伝達内容を“正確に表す信号”に翻訳されなければならない。最後に、その信号は受信者によって“適切なやり方で解読”されなければよい伝達は行われぬ。一方、音楽などの芸術ではどうであろう。B.リーマーによれば、芸術家は“伝達内容”から始めるのではなく、創造の最初にくるのは“衝動(impulse)”で、次に、“試しにやってみる動き”がくるのであり、「この過程はもともとある伝達内容を送るための適切な信号を選ぶ過程とは根本的に異なる」という²²。

そしてさらに「芸術家と鑑賞者の間に起きることは、伝達ではなくて“共有”である」ともリーマーは言う。それによれば、芸術作品は芸術家の“感情の洞察”の具体化を含み、この具体化は鑑賞者の側に“感情の洞察”を引き起こすことができるが、鑑賞者の洞察は芸術家のそれと“正確に同じではありえない”という。「情報を提供する」という観点からいえば“具体的なことを指示しない”音楽はそれを伝える手段にはならないかもしれない。しかし、“感情の洞察を共有できる”かどうかを判断すればそれは違う文化の人にも可能であろう。人間は皆、万人に共有することのできる基本的な“感情”をもっているからである。言葉の違う人が“魂”“真心”から演奏する音楽に素直に感動できるのは、このことからくるのだろう。

このように音楽は“文化の違う人々にも共有されることのできるコミュニケーションとしての媒体”であるからこそ、異文化交流に使われているのだろう。小倉利丸も次のように述べている。

「翻訳という過程を経ることのできない言語は、その段階で、受け手によって拒絶される。言語が発する音やかかれた文字の意味は、まったく理解を拒絶されたものとして受け手には受け取られてしまう。音楽は、そうしたコミュニケーションの切断を伴わない。そのかわりに、伝達された音は、オリジナルの意味から切り離されて、受け手の自由な解釈の中

に取り込まれてしまう。いやむしろそのような受け手の取り込みが可能であることによって、音楽は異なる文化の間を伝播するのだ。」²³

言語のときと違い、音楽は具体的に“その意味する内容を表す”ことはできない。嬉しい時に音楽をもってその表現を共有することはできるが、「どうして嬉しいのか」その内容を知ることはできない。渡辺護は「芸術作品を作るのはそこに『創作したい』、鑑賞するのはそこに『見たい、聴きたい』という欲求があるからで、目的を意識して行うのではない」、つまり芸術は言語のように“実用目的のためにある”のではなく“やりたいからやるのだ”と述べている²⁴。

芸術家 創作したい → 芸術作品 → 鑑賞したい 鑑賞者

このように、芸術的行動はそのものの中に目的性ももちながら、伝達を必要とする構造をもっている²⁵。つまり、創作したい人がいて、それが“作品”を通して聴きたい鑑賞者に受容される。そのことで「芸術がコミュニケーションの道具となっている」のである。

音楽を作り出す人は“誰かに伝えたい”という意図的な目的をいつももつということに限らない。伊能美智子が「いい気分のときに歌を歌いたくなったり野山で声を張り上げて歌いたくなったり、そういった瞬間から音楽が生まれる」²⁶と述べているように、特別“伝えたい”という気持ちがなくとも音楽が作られるときはある。音楽の不思議な点は、そうした人間の抱えている観念なり感情を“音楽”を通して表現することで、それを聴くものが知ることができる²⁷、という点にある。

以上、音楽で伝えることについて考えてきたが、“伝えよう”という目的がなくても音楽は聞く人に伝わるという“コミュニケーション”としての機能を果たしていることが分かった。それでは、その“目的がない音楽”でも、それを聴いているものが“その表現で何かを受け取る”とはいったいどういうわけだろうか。

Ⅲ－２．２ 音楽から受け取れること

音楽の表現から「受け取れること」を考える観点として、それをとらえる部分である“脳”について考えてみよう。最近の脳の研究でもよく言われているが、“概念的思考”をつかさどる部分（左脳）と、“感情”をつかさどる部分（右脳）は違うようである。その証拠に脳を損傷して言語を理解できなくても音楽的能力は失われぬという事実がある²⁸。レスリー・バントは、「音楽を専門的に勉強している人は“左脳”優位で“音楽をかなり分析的・論理的”にとらえるのに対し、音楽的経験の少ない素人は右脳優位で“音楽を全体として知覚”する」²⁹ということを述べ、また、次のような分析を試みている³⁰。

	ミュージシャン (専門家)	ノン・ミュージシャン (素人)
音楽の訓練	よく受けている	あまり受けていない
音楽を語る時	音楽的な発想用語を使う	類似・隠喩を使う
保持される情報量	多い	少ない
情報の中身	根底にある背景や細部まで	重要な要素だけ
音楽の捉えかた	分析的にとらえる	全体として知覚

このように、音楽の専門家になると音楽を“分析的”にとらえ、それまで培った知識や経験を総動員して細部まで考えようとするが、深く考えなくとも音楽を純粹にとらえる素人には音楽を“感覚”として右の脳で感じているのかもしれない。

現代の音楽は細分化し変化をして新しい音楽がどんどん生まれている。塚田健一は「文化の中では感性が知性に先じる。世界の音楽的感性が探し求めて進んできた方向に、わたしたちの知の枠組み、ひらたく言えば、ものの考え方がついていっていない」³¹と述べているが、今までの知識を総動員して音楽を“考えよう”とするならば、世界中のほとんどの聴衆は音楽を楽しむことを諦めてしまうのではないだろうか。音楽は知識（知っている内容・意味）をもって“考えよう”としなくても気軽に楽しめるものである。子供も音楽を楽しむことができるというのは、この辺からきているのであろう。

伊能美智子は音楽が他の芸術と違う点として“具象化できない”ということあげているが、具体的に指示していることが何もないだけに「音楽を聴く人間の想像力や、創造力をいくらでも羽ばたかせる」ことができ、それだけに「音楽は純粹に私たちの心を強く捉え、私たちの感覚を刺激する」³²と述べている。人間は“考えること”、また“創造できること”によって進化の道を進んできたが、であるから、抽象的な音楽によってもそこから自分の創造（想像）力を働かせてさまざまな事柄を推測し、表現したいことに共感することができるのだらう。

小林秀雄も同様に「音楽が**聞く人の気紛れな解釈に堪えるのは、裏返してみれば音楽の異常な純粹さ**を証明する。…中略…人々が勝手な感情を、そのまま音楽に映し、音楽が確かにそういう感情を表現していると考えのもまことに自然なことです。」³³と、演奏者や作った者の意図に関わらず、聴いた者が自分の自由な感覚で“違った観点からも”作品を捉えることのできる音楽の柔軟性について述べている。

社会でのさまざまな場面（娯楽や、趣味、人とのコミュニケーション）で音楽の占める比重が増大している。1960年代半ばまでは時代の文化を代表するジャンルは文学であったが、後半からは事情は変わり、多くの若者は表現手段として、文字ではなく“音”を選んだ³⁴。人間は考える生き物である。しかし、難しい思考回路を経るものではなく、自分の自由な感覚を使うことのできる“音楽”であるから、異文化の人々にもコミュニケーションの手段として使うことができるのだらう。

Ⅲ－３． 人々の心を動かす音楽

ある音楽に「心を動かされた」という話をよく聞くことがある。宇野功芳は、N 大オケが以前 8 割が初心者で弦は惨憺たる状況だったにもかかわらず感動的な演奏をし、「情熱の火で舞台が火の海になるほどだった」³⁵とその感想を述べている。われわれの周りでもこのように“音楽によって感動した”という話がよく聞かれるが、ここでは“どのように人々の心を動かし”、その結果“どういったことが起こるのか”ということについて考えてみたい。

Ⅲ－３． 1 聴くことと感情の動揺

“人間の感情を動かす”ということはそう簡単にできるものではない。自分の意志でも本当に笑ったり泣いたりすることは難しい。しかし、言葉にならない感情が“声”や“音楽などの芸術”で表された時、われわれの感情に直接訴えてくることがある。映画ではその効果を盛り上げるために音楽を使っているが、音楽がなければその表現性は半減してしまうだろう。「無声映画の時代でさえ、さまざまなエピソードの感情的意味合いを強め、はっきりと打ち出すためにピアニストを雇い入れなければならなかった」³⁶といわれているが、このように聴くことと感情を動かすことは密接な関係がある。実際、メラネシア系の人々の間でも、音楽は死者への悲しみや恋愛の感情などを喚起するものとされ、儀式などで使われている³⁷。このような効果をねらい、今日ではさまざまな場面で“その雰囲気にあった”音楽が作り出され使い分けられている。

ところで、その音楽が作られる背景には何があるのだろうか。武満徹は日本映画の作曲家としてもよく知られているが、彼は「東西にまたがって分布している昔からの音楽、文学、絵画、日常生活に起こる事件のすべてが作り上げる音楽と密接な関わりをもっている」と、音楽的な表現行為を始めるに際して“周囲の多くの状況から影響を受ける”ことを述べている³⁸。また、『ペイネ・愛の世界旅行』（イタリア映画；1974）の音楽を担当した A. アレッサンドローニも、“映画音楽を作曲する際に気をつけていることは？”という問いに対して、「人生を考えたり、世界の色を想像したり、わたしの心を刺激するもの全てに思いを巡らす」と答えている。アレッサンドローニにすると、作曲活動は“愛の宣誓”であったり、“詩”であったり、“人生そのもの”であるというが、彼はいつでもそれらの作品に「自身のエッセンスを何か盛り込めればと願っている」と述べている³⁹。

これらのことから、作曲家はさまざまな影響を受け思索する中で音楽を作り出しているということがいえる。B. リーマーも、このように芸術家が作り出すものの中には「その特定の作品に至るまでの、その芸術家の洞察のありのままの姿が含まれている可能性がある」

と述べている⁴⁰。つまり、芸術家が思いを込めて作り上げた、また演奏された作品の中には、影響を受けたものが投影されている可能性があり、それを鑑賞しているものがその“洞察”を共有するということはありうるだろう。

真鍋圭子は「音楽には嘘がない。舞台に立ったときには、どんなに自分を隠そうとしても隠すことができない」と、芸術家の洞察や感情が現れてくるからこそ人間の感情に直接訴える力がある、ということ述べている⁴¹。バイオリン奏者の千住真理子も、“人間は極限状態におかれたときにはその本質がむきだしになる”ことから、演奏家も極度の緊張状態におかれたときには身も心も繕う余裕はなく、精神性も技術面もあるがままで勝負することになるので「聴衆となったときに実際演奏家から聞こえてくるものは、その人間性であり、人格であり、生きざまなのである」⁴²という。

これらの証言からも、音楽がその表現だけではなく、人間の本質までもを表現している可能性があるということがいえる。そして、聴く者はそのあらわになった表現から心に訴えるものを感じ取るのだろう。近年、音楽を使った療法が脚光を浴びてきているが、音楽療法の分野から見ても、「音楽は“発散的”であり、知的過程を通らずに“直接情動に働きかける”治療的特性をもっている」といわれている⁴³。このようなことから、難しい説明はらず“患者の感覚に直接響く”音楽を通して、患者と治療者が同じ立場に立って感情を共有できることが治療に役立っているといえるだろう。

内田るり子は「音楽の中でも特に歌は人の身体が楽器となるので、他の楽器の媒体を通さずに人の心から人の心へとそのまま直接つたわってくる」と、特に“歌”が人の心をゆすり、共感を覚えさせることを述べている⁴⁴。声は人間の誕生のころから利用してきた音の表現の手段であったので、声こそ“感情に訴える”表現がしやすいのかもしれない。総務庁が派遣した「ネパール青年海外派遣団」で交流をした日本の青年は、交流の感想の中で「トレッキングが終わった日の夜、シェルパ達が歌ってくれた『レッシュャン・フィリリ』と涙の味は一生忘れません。」と述べている⁴⁵。彼は見知らぬ土地で知り合った現地の人たちの“歌声”に感動したのだが、それはまだ彼の心の中で生き続けている。このように感情に直接訴え心を動かした出来事は一生忘れない思い出となることだろう。

Ⅲ－３．２ 感情の表現

「音楽から何を表現することができるのか」という問いを考える際に、人間として生を得たばかりの赤ん坊の様子に注目してみたい。赤ん坊は、“痛み”や“苦しみ”にともなって泣き声をあげるが、その泣き方はどの国の子どももきわめて類似しており、その泣き声の大きさ、長さ、高さは「痛み、空腹、悲しみ」などの要因に影響されるという⁴⁶。赤ん坊は自分の感情をストレートに出すが、それが泣き声という“音”になって現れるのだろう。言葉という表現手段をまだ得ていない赤ん坊は、動物などと同じように“未発達な音

声”を使って何かを表現するしかすべがないからである。

人類の祖先はこの赤ん坊の表現と類似していたのではないだろうか。内田るり子は、「人類学的な解釈から考えるとすれば、人はまず歌う前に叫んだろう」⁴⁷と述べている。例えば、獲物の発見、収穫の喜び、男女の愛の表現など、これらの“叫び”“表現”がやがて歌に発展していった、というのである。最古の時代、自然民族の文化には未分化のコミュニケーション方法（唸り声や、叫び声、泣き声のようなもの）が存在したといわれている。それは会話でも音楽でもなかったが、両方に共通する“三つの属性（音高）（強勢）（持続）”をもっており、長期にわたる文化と特殊化の段階を経て、言語は「母音と子音」という性質、音楽は「固定化された音高」という性質を獲得していった⁴⁸。

人間はコミュニケーションをしていく中で自分を表現していくわけであるが、それがいろいろな形で作品として表現されたものが“芸術”となったのであろう。B.リーマーは「芸術作品は、人びとが、生きていくということの状態を、見て、理解することができるように、それをとらえて示した表現形である。」と述べている。例えば、音楽は、メロディ、ハーモニー、リズム、音色、テクスチュア、形式によって表出される“美的特質”が生きているという状態を表現している、つまり“生命の状態”が「芸術作品の美的特質の中に具体的に表現されている」⁴⁹というのである。

“音楽”でもって「自分たちが本当に表したい気持ちを表現する」ことは、音楽家でなくとも、素人でも行うことである。“楽しい時”に限らず、時として“怒りの感情”が音楽となって表現される場合もでてくるだろう。内田るり子は、江戸時代に人民が圧迫されているときの封建社会での例をひき、当時の政治や階級の違いが歌の発声に大きな影響力があったことを述べている⁵⁰。それによると、当時の人民の心の中に“権力者に対するレジスタンス”が生まれ「心の底から搾り出すような」徳川時代の民謡が生まれた、という。しかし、武家階級は町人とは違った発声をしなないと“威厳が保てない”という意識から、「重々しい口調の」謡曲の発声が生まれた、という社会背景があったというのである。

外国の例でも、タンザニアのレゲエミュージシャンであるキンブトゥが「ソウルやジャズは激しく抑圧された黒人の感情を表現し、自分たちの尊厳を叫んだ。レゲエはそれらの頂点に立った。黒人の尊厳を、抑圧されたすべての人々の解放を求める音楽だ」⁵¹と述べているように、黒人は長い間の白人からの支配を受けて抑圧された感情を“音楽”で表現しようとした。また、ジンバブエのミュージシャンのマプフーモも少数白人スミス政権に抵抗する歌を歌っていたが、彼は「周囲にはまだ開放されていない人々がいることがわかる。何処へ行っても、まだ闘いを続けている人びとがいる。（中略）音楽は人民の声であり、自分を語れない人々のための声なのだ」⁵²と、言葉で表せない民衆の気持ちを音楽が表そうとしていることを述べている。

B.リーマーも、「もし人間が本質を理解するのに利用できる手段が言語しかなかったとしたら—ことばであっても、何か他の指示体系であってもよいが—一人間の現実の大部分は

永久に閉ざされて、理解されないままになるであろう。」と述べている⁵³。言葉ですべてを語ることができるなら、その他のコミュニケーションは必要がなくなってしまう。しかし、実際はそうではない。リーマーは更に述べる。

「現実の観的な部分—人間生活の中の感情—は、言語を用いて取り出してみせ、知覚し理解させることはできない。…中略…感情の本質がもともと言語で表現できないものだからである」

このように、“言葉に表すことができないものがあるからこそ” 様々な非言語コミュニケーションの媒体が存在しているだろう。音楽はその“感情の本質”を表現する役割をもつ一つの媒体であるということがいえる。

Ⅲ－3. 3 人びとをつなげる音楽

今まで述べたように、人の感情を表現し、他の人の感情に訴えることのできる音楽は、どのように人々に影響を与えるのだろうか。

精神医学の世界では、治療者は患者と“心のつながり”がうまくいっていないと効果的な治療はできない。L.バントが「音楽療法士は、対象者の障害の程度にかかわらず、問題の背後にある人間そのものに接触し、音楽的交流をとおして感情的なつながりをもつ」⁵⁴と述べているように、こうした“人間関係”を基盤にして、音楽療法の世界では治療目標を話し合い、運動技能や学習能力あるいは情緒的行動の向上を支援している。このことから、音楽には人の心を解放し、互いの心をつなげる働きがあるとはいえないだろうか。

前から述べているように、音楽は難しく考えなくとも感じるができるものである。実際、この複雑な現代社会で“精神的に疲れている”とか“つながりが希薄になっている”といわれる現代人の間でも音楽は友好なつながり（コミュニケーション）の媒体となっている。代表的なものとして、最近の音楽文化のひとつともなっている“カラオケ”を取り上げてみよう。“カラオケ”の場では、皆それぞれ好きな歌や好きなアーティストの歌が歌われるが、そこから、“互いに知っている曲”や、“互いが好きな曲”について話題が提供され、時にその歌声が聴いているものに“共感”を呼び覚ます場合も出てくるだろう。通常は、あまり聴いてない現実もあるが、“カラオケ”には人々をその“場”に集わせ、友好関係を図るという機能を果たしているのは事実である。つまり、“カラオケ”は、そこにいる人々との共有感覚を媒介する役目をしていることになるだろう。成田康昭はカラオケについて「初対面だったり、まだよく知らない同士の間で“親密感”や“連帯感”を胚胎させ、つながりを形成するのに便利なメディアだ」と、その印象を語っている⁵⁵。

このように手軽に利用できる音楽は、いったい人々の間にどういう影響を与えているのだろうか。このことを考えるにあたり、再び音楽療法の観点から「音楽療法で効果のあったものは何か」ということについて考えてみたい。バントは、音楽療法の数回のセッション

ンの合間に“ブレインストーミング⁵⁶”を行い、そこから多くの自発的発言（ことばや短文）を得て、分類の目安となるいくつかの概念を抽出している⁵⁷。その研究によると、いくつかの＜変化＞が見受けられている。まず、個人的な感情では実験当初は「喜び・落ち着き・悲しみ」といった“受動的な感情”をあらわすものから、「力強い、肯定的、関係、理解」といった“能動的経験”への移行が見られた、ということがあげられている。そしてさらに、「元気が出る、ほっとする、憂うつな、悲しい」といった“個人に及ぼす影響”をあらわす言葉から、「コミュニケーション、一体感、調和」などの“共同作業への意識をもつ言葉”（グループに対する効果をあらわすことば）への変化があった、ということが見られたそうである⁵⁸。

＜個人的な感情＞

喜び・落ち着き・悲しみ → 力強い、肯定的、関係、理解
 “受動的な感情” “能動的経験”

元気が出る、ほっとする、憂うつな、悲しい → コミュニケーション、一体感、調和
 “個人に及ぼす影響” “共同作業への意識をもつ言葉”
 (グループに対する効果をあらわすことば)

バントは、このような結果になったこと理由として、ほとんどのグループにとって“一体感”および“対人的な調和願望”のあらわれは「共同で音楽をつくる経験がきっかけ」となっており、「この経験は集団文化やグループアイデンティティの発展の可能性を秘めている」⁵⁹と述べている。

渡辺護は、“自己目的性（何かの目的があるのではなく、それ自身の内に目的があること）”からみると芸術の体験は基本的には全く“個人的”であるが、その“伝達性”からみるなら、芸術は“社会性”を持つ、つまり「人と人、人と集団、集団と集団との関係に於いて芸術は成立つ」⁶⁰と述べている。他との関係性という面からいえば、よい例に“ジャズ”をあげることができるだろう。New Orleans に在住するジャズクラブのオーナー、ジム・マックスウェルが「ジャズミュージシャンは、皆他のミュージシャンがしていることを感じ取らなければならない」⁶¹と述べているように、“ジャズ”ではアドリブ（即興演奏）の演奏の中で他の演奏者の音楽（フレーズやコードの流れ）を感じ取る必要があるとされる。その絶妙な演奏者たちのやりとりに聴衆は感激し、ジャズの醍醐味を味わうことができる。

昔から、若者がコンサートなどで興奮し、感動する様子を“ノッてる”という表現をする。音楽では“共有”“共感”ということが大事なことであるが、この“ノリ”を共有できた状態が、演奏者と観衆、そして観衆同士が互いに音楽でコミュニケーションをしているということがいえるだろう。E.ラドシー・J.ボイルも次のように述べている。

「音楽は、参加をすすめる、参加をはげます社会現象である。音楽以外の理由では、互いに

接触しようとはしないであろう人々を寄り集まらせ、集団活動をおこなわせる。音楽は、親密だが整然とした、しかも社会的に望ましいようなやりかたで、人々が相互作用する機会を、提供するのである」⁶²

人間関係が希薄になっている現代人が、音楽活動を通して何かを共有しつながりをもつことができる。このことこそ、音楽が人びとを結びつける“コミュニケーションの媒体”としての役割があるといえるだろう。

Ⅲ－3. 4 思い出す～時空の超越

“共有”ということについて述べたが、ここではその“共有されたこと”がどのように心に影響を与えたかということについて考えたい。

小さいころ歌い印象に残っているうたは、時が変わってもいまだに忘れないときがある。J.ルソーは幼い頃に聞いた叔母の優しく懐かしい歌声について、「彼女の歌は私にとって非常に魅力があったので、そのいくつかの歌はいつも私も記憶に残ったばかりか、記憶力をなくした今日、子供のときから完全に忘れてしまった歌までも、年をとるにつれて、言いようのない魅力とともに、またよみがえってくるほどである」⁶³と当時のことを懐古している。

皆、小学生くらいの時には、学校などでみんなで歌う経験をすると思うが、当時歌ったうたはいつまでたっても忘れないことがある。小泉文夫は、明治時代に育った人が70年後に初めて録音を頼まれてもまったく同じように歌いだすことができる例をひき、いつまでも思い出すことのできる“わらべ歌”のもつ貴重な音楽性の本質について述べている⁶⁴。成田康昭も、自らの経験から、昭和30年代の日本では「お客」を招いての酒盛りがはじまると、皆が手拍子しながら歌うという風景が当たり前にあったことを通し、「現実の上では失われてしまった共同的な世界が、歌に呼び出されて心情の中に蘇るのを人々は共に体験しえたのである。」と述べている⁶⁵。同窓会の時など皆で思い出の歌をうたうのは、当時の思い出を共有することができるからではないだろうか。姜信子は「たったひとつの歌が、その音とリズムで一瞬にして見慣れた空間を別の世界へとつくりかえ、心臓の鼓動のリズムを変えてしまう」⁶⁶ということさえ述べている。このように、音楽は聴いている人を過去の時代にさかのぼらせ、その“時”を思い出させることがある。

一方、聴いた音楽によって場所という“空間”が変わって感じられることもあるだろう。田森雅一は一時期インドに滞在していたが、日本に戻り東京の町を歩いていて、インドで聴いた太鼓(タブラ)の響きを聴いた。その響きはすぐには思い出せなかったそうであるが、家に帰ってアルバムを見ていると、「昔、インドのヒッピーの多い安宿の前で聴いたインドの光景が思い浮かんできた」と彼はいう⁶⁷。

これは過去に現地に行って音楽を聴いた例であるが、また、現地に行った事がなくても“そこに行ったような雰囲気”にさせてくれるのも音楽の効果の一つにあげられる。ハワイの雰囲気をかもし出すためにハワイアンのスチールギターなどが流されていることがあるが、塚田健一は「音楽は、それを聴く人びとのうちにすでにできあがっている異文化のイメージをさらに増幅するはたらきをする」⁶⁸と述べている。筆者がアメリカに滞在していたとき、中国から“中国国立管弦楽団”が来て演奏会が開かれた。初めは、西洋の形式のオーケストラかと思っていたが、中国古来の民族楽器（二胡や琵琶、銅鑼など）を中心とした楽団で、演奏終了後は聴衆が大喝采をした。私はそのときの演奏を聴いて「まるで自分が中国に来ているような」感じがしたことを覚えている。

白石顕二は、南アフリカのミュージシャン、ブラック・マンバーズが 90 年に日本に来日したおり、その演奏を聴いた感想を「彼らが歌い始めるやいなや、舞台はアフリカの大地へ、一瞬にしてタイムスリップするのだ。」⁶⁹と、現在いる場所がまるで違う錯覚を起こすほど、コンサートで感じた影響力の強さを述べている。

このように、音楽は忘れかけていた時を思い起こさせ、また、今聴いている空間が変わって感じられる可能性を秘めている。それによって、昔出会った人と共有された出来事や体験が思い起こされたり、今いる現実の場所でも、同じような空間が共有されて感じられるということがあるだろう。このことで、現実では様々な問題を抱えていたり、なかなか会うことができなかつたりする人々の間にもつながりができる、ということが言えるのではないだろうか。

Ⅲ－3. 5 社会を動かす音楽

「音楽は空間を変える」ということについて、塚田健一は「音とか音楽というものは『場所』という観念と分かちがたく結びついて存在してきた」と述べている⁷⁰。つまり、日本で春を告げるウグイスの独特な鳴き声は、インドやアフリカでは決して聞くことができず、逆にアフリカのサバンナにすむライオンはわたしたちの日常の音の風景のなかに現れてはこないように、「それぞれの地域がそれぞれ独自の音の世界をつくり上げてきた」と塚田はいう。確かに日本ではお正月といえば箏の音色がいたるところで聞かれ日本独特の情緒を感じさせるが、音楽とそれを生み出した風土や文化との結びつきは分かち難いものがあるといえる。

このようなことから、音楽はたんに“聴いて楽しむ”という享受の対象以上に、社会的に“異文化を表現する手段”としてたいへん重要な位置と役割を与えてきた。塚田は「ある集団が他に対して集団としての『自己』を主張したり、表現したりしなければならない状況が起こるときには“文化的シンボル”としての音楽が用いられる」⁷¹と述べ、例として、ラオスという多民族国家のなかで『ケーン』という楽器がラオ族のシンボルとして彼らの

民族的意識を表現するのに用いられていることを紹介している。また、台湾の先住民族は、昔民族同士で「首狩り」の風習があり闘いの前に歌を歌ったが、小島美子によれば「その鋭い敵対関係のなかで、各民族は自分たちのアイデンティティを確保するために独自のハーモニーを発展させた」⁷²という。アフリカではスワヒリ語で太鼓のことをンゴマ ngoma というが、アフリカでは太鼓はわれわれが考えるような音楽の一要素としてのリズムを叩き出すだけのものではなく、音楽・舞踊、さらに祭礼までを代表するものであり、多面的な要素をそなえている“神器”である。つまり、われわれのとらえ方と大きな違いがあるということであるが、江波戸昭によれば、「新大陸アメリカで白人たちが黒人奴隷に太鼓の使用を禁じた理由は、“太鼓”が連帯感を呼び起こすことに気付いたからである」という⁷³。

このように、民族や集団としての存在を確認させたり、意識させたりする力が音楽にはあるようだ。E.ラドシー・J.ボイルによると、音楽の最も重要な機能として「諸個人を集団活動に参加するようすすめる、はげます社会の統合に対する貢献」をあげている⁷⁴。それによると、音楽は人々が寄り集まるための信号として使われたり、集団の諸活動にたずさわるために諸個人がそこにあつまる集結地点として使われる、という。実際、昭和40年代の日本でも、駅構内や公園などでフォークソングが社会運動の中で皆が集まる中で使われたことがあった。これは皆が共に歌うことによって、自分たちの集団としての連帯感を高めていたのだろう。山口修もミクロネシアにあるペラウ共和国での例をひき、各村で「議会」にも似た集会の中で歌を順番に歌ったり、村祭りや歌や踊りを披露する、といった機会を通じて音楽や舞踊の統一がはかられ、連帯感を深めていたことを述べている⁷⁵。

内田るり子は、読経や賛美歌の例など、大勢の人が唱和することによって一つの連帯感が生まれ一つの気持ちになることができるという点から「宗教にとっては、たいへんつごうがよいことになる」ことを述べている⁷⁶。確かにキリスト教の伝来と共に西洋の文化も世界各地に流入していったが、実際、各地ではぐくまれてきた文化やものの考え方はそう簡単には変わるものではない。植民地時代のジンバブエではキリスト教に改宗した結果、いままでの儀式で演奏されていた音楽が衰退したが、植民地政府からの独立運動が激化すると、今度は伝統的な儀式や音楽が民族的アイデンティティの象徴として見直され、復活していった⁷⁷。

本来「自由でありたい」という人間としての気持ちは、時として、それを押さえつけようとする権力に対する“叫び”を表現するためのものとなる。ある社会では“タブー”とされているような事柄に対して使われることによって、音楽は、はっきりと言葉では表現しえない考えや観念を放出させ、社会問題に関して“抑えていた感情をぶちまける”機会をつくり出す⁷⁸。実際、ジンバブエのミュージシャン、サイモンは反体制の原動力となった音楽についてこう述べている。

「ジンバブエの音楽はね、社会の心臓なんだよ。それは人民のなかに生きている。だから社会の問題に音楽は最も機敏に反応する。体制へ批判的にもなるんだ。それに音楽の場合

だと、検閲するのが難しいからね」⁷⁹

民衆の台頭を恐れる権力は、このように知らず知らずのうちに自分たち集団の主張をし、人々を団結させる“音楽の力”を恐れ、時に高圧的な態度で音楽などの芸術活動を禁止しようとしてきた。例えば、1990年にアフリカのナイロビで、ミュージシャンのカマルの店で“政府批判を煽動しているといわれる歌”の音楽テープを警官隊が押収する、という事件が起こっている⁸⁰。また、南アフリカでは、ミリアム・マケバらのポピュラー音楽が“黒人の民族意識を覚醒させ連帯意識をあおる危険なもの”とみなされ演奏が禁止された⁸¹。歴史を見ても、イングランドは18世紀なかばにスコットランドを制圧すると、ナショナリズムを封じるためにその文化のシンボルであるバグパイプの演奏を禁じている⁸²。

このように民衆を操作しようとする権力にとっては時に、民族意識を興隆させる音楽を代表とする芸術文化が脅威になるようである。実際、今までの革命や変革に歌はつきものであった。江波戸昭によると、次の曲を例としてあげている⁸³。

- ・フランス革命→「サイラ」
- ・メキシコ革命→「ラ・クカラチャ」
- ・ビロード革命（チェコスロバキア）→「マルタの祈り」
- ・ルーマニア動乱→「イエロー・サブマリンの冒頭の部分」

アフリカでは、独立を果たした後、多くの国で「国立民族音楽舞踊団」が続々と誕生した。その背後には“西欧列強の文化に対して自らのアイデンティティを鼓舞しようとする意図がある”とともに、“多くの民族集団を統合し多民族国家を成立させる”という政治上の要請から、「これらの舞踊団はこの『部族』を強調するよりも、国民文化といった各『部族文化』を統括的に統合するような方向に発展していった背景がある」と塚田は述べている⁸⁴。独立を果たしたとはいえアフリカの国のように未だ細かい部族の文化を抱える社会では、文化を“統合”することによって、その国の文化というものが表されているようである。

世界の距離が短くなり異文化の混交してくる現代では、このように文化はいつまでも型にはまったままの固定化したあり方ではなく、時には時代の要請される方向に変化していくことも必要になってくるのではないだろうか。

<注>

¹ 『音楽の語るもの』J.ペインター・P.アスト著、山本文茂・坪能由紀子、橋都みどり共訳、音楽之友社、1982、25 p

² 『音楽する社会』小川博司著、勁送書房、1988、28 p

³ 『芸術学[改訂版]』渡辺護著、東京大学出版会、1983、128 p

⁴ 『考える百科シリーズ⑥音楽の歴史』三省堂編修所訳、三省堂、1974、7 p /
(The Wonderful World of Music/ B. Britten& I. Holst. Aldus Books. 1968)

⁵ 『音楽行動の心理学』E.ラトシ・J.ホイル共著、徳丸吉彦、藤田英美子、北川純子共訳、音楽之友社、1985、69 p

- 6 『ハンズリックの音楽美論』田村寛貞訳著、音楽之友社、1956、201 p
- 7 もっとも調和のある美しい分割法。この比は優れた美術作品や建築にしばしば意識的、もしくは無意識的に採用されている。また、黄金比と近似する数列は種子の配列、貝殻の渦の成長など、自然界にしばしば見られる。
;『世界大百科事典』CD-ROM、日立デジタル平凡社、1998
- 8 『植物と話がしたい』神津善行著、講談社、1998、108 p
- 9 『子どもの発達と音楽』筧三智子著、音楽の友社、1977、31p
- 10 『国際協力プラザ 12月号—vol. 54』国際協力推進協会発行、1998
- 11 前掲 5、222 p
- 12 前掲 6、202 p
- 13 前掲 8、168 p
- 14 『音楽する精神』アンソニー・ストー著、佐藤由紀・大沢忠雄・黒川孝文共訳、白揚社、1994、22p
- 15 『音楽ってなあに』伊能美智子著、春秋社、1987、29 p
- 16 前掲 8、169 p
- 17 『マクルーハン入門』M.マクルーハン・E.カーペンター編著、大前正臣・後藤和彦訳、サイマル出版会、1967、
- 18 『比較文化論—異文化の理解—』山口修・斎藤和枝編、世界思想社、1995、85 p
- 19 『人生読本—音楽—』清水勝発行、河出書房、1983、199 p
- 20 『音楽教育の哲学』ベネット・リーマー著、丸山忠璋訳、音楽之友社、1987、174 p
- 21 前掲 19、13 p
- 22 前掲 20、86 p
- 23 『音の力』DeMusic Inter 編、インパクト出版会、1996、240 p
- 24 前掲 3、26 p
- 25 前掲 3、30 p
- 26 『音楽ってなあに』伊能美智子著、春秋社、1987、53 p
- 27 『音楽の不思議』別宮貞雄著、音楽之友社、1971、187 p
- 28 前掲 14、62 p
- 29 『音楽療法』レスリー・ハント著、稲田雅美訳、ミネルヴァ書房、1997、491 p
- 30 前掲 29、189 p
- 31 『はじめての世界音楽』柘植元一・塚田健一編、音楽の友社、1999、7 p
- 32 前掲 26、37 p
- 33 前掲 19、205 p
- 34 前掲 2、36 p
- 35 『音楽の友 4月号』音楽の友社、1998、72 p
- 36 前掲 14、48p
- 37 『ソロモン諸島の生活誌—文化・歴史・社会—』秋道智彌・関根久雄・田井竜一編、明石書店、1996、196 p
- 38 前掲 19、51 p
- 39 『ペイネ・愛の世界旅行』CD、SLCS7306、サウンドトラック・リソース・コミュニケーションズ
- 40 前掲 20、92 p
- 41 『サンデーインタビュー』聖教新聞 1999.2.3 日付、2 p
- 42 『生命が音になるとき』千住真理子著、オーム社、1995、133 p
- 43 前掲 29、490 p
- 44 『人間と文化』新書編纂委員会編、三愛会、1980、84 p
- 45 『国際青年育成交流事業報告書（第4回）』総務庁青少年対策本部編、1997、202 p
- 46 前掲 29、111 p
- 47 前掲 44、83 p
- 48 前掲 5、163 p
- 49 前掲 20、130 p
- 50 前掲 44、93 p
- 51 『アフリカ音楽の創造力』白石頭二著、勁草書房、1993、
- 52 前掲 51、208 p
- 53 前掲 20、73 p
- 54 前掲 29、231 p
- 55 『Communication4月号 No.78』NTT 出版発行、1999、24 p
- 56 創造性を開発するための集团的思考の技法。会議のメンバーが、自由に意見や考えを出し合って、すぐれた発想を引き出す方法。;『広辞苑第5版』小学館
- 57 前掲 29、219 p
- 58 前掲 29、219 p
- 59 前掲 29、221 p
- 60 前掲 3、37 p
- 61 『アメリカサウス紀行』NHK 教育TV、99.2.12 放送、79 p
- 62 前掲 5、158 p
- 63 『ルソー全集第1巻』ジャン・ジャック・ルソー著、小林喜彦訳、白水社、1979、20 p
- 64 『音楽の根源にあるもの』小泉文夫著、平凡社、1994、95 p

-
- 65 前掲 55、22 p
66 『日韓音楽ノート』 姜信子著、岩波書店、1998、3 p
67 『インド音楽との対話』 田森雅一著、青弓社、1990、18 p
68 前掲 31、13 p
69 前掲 51、217 p
70 前掲 31、13 p
71 前掲 31、13 p
72 前掲 55、7 p
73 『世界の音、民族の音』 江波戸昭著、青土社、1992、163 p
74 前掲 5、155 p
75 前掲 18、92 p
76 前掲 44、92 p
77 前掲 31、37 p
78 前掲 5、154 p
79 前掲 51、206 p
80 前掲 51、56 p
81 前掲 31、16 p
82 前掲 31、15 p
83 前掲 73
84 前掲 31、37 p

第IV章 異文化と交流を進めるための視点

IV—1. 異文化を理解するために

第I章で、“同質性”を重んじる日本社会の状況について述べた。姜尚中によれば「この“同質シンドローム”を支えたのは学校教育であり、極端にできる人間、落ちこぼれはつからず、平均的で同じような感性、同じような国民意識をもった人々を教育してきたところから、日本の社会はこのような状況になっていった」という¹。しかし、姜は「冷戦崩壊以降は社会のシステムが変わらざるを得ないところに来ている」とも述べている。つまり、国際化が進み、文化の違いによる問題が増えつつある中で、日本でも“異質なものを受け入れながら、異質なもの同士との間で効率性と富をつくりだす時代が来ている”というのである。

定形衛も、違った相手からも謙虚に学ぼうとすることで“それまでの伝統の文化や決まりきった考え方が豊かになっていく”ことを次のように述べている。

「同じ社会で生活する他の民族からその『文化の作法』を学ぶことは、自分たちの文化を豊かにすることにつながるであろう。たんなる文化の多元性や共存ではなく、相互に学習し理解していくこと、そして新たな文化を創造していく努力が民族の共生を可能にし、確かなものにしていくのではないだろうか。」²

この言葉は、異なるものを排除しようとしてきた日本社会に「多様な異文化との共存には、“互いに学びあう”という視点が必要だ」という方向性を示しているように思える。

実際のところ、自分の信念が脅かされることを恐れたり、プライドを考えるためか、自分とは異なる考え方に対しては“素直に認めたくない”人もいる現実がある。しかし、E. ボールディングは「心から耳を傾けなければ、相手が何を考えているかを知ることができない」³という。受け入れる姿勢がなければ、異文化にまたがる問題の本質、核心をつかむことはできないだろう。

われわれは、一時的な判断や好みで物事を判断することがよくあるが、一般に、世の中には「自分の意見が絶対に正しい」とその主張を譲らない人と、「それももつともだ」と他人の意見を受け入れる人がいる。八代京子によると、一つの事象についてどれだけの差異を許容するかを『カテゴリー幅』と呼び、それが“広い人”と“狭い人”がいる、という⁴。

それによれば、“広い人”とは「包括的に物事を認識し、かなり相違があっても小さな共通点があると『同じカテゴリー』と見なす人」のことで、違いに寛容であり、多少の違いがあっても仲間と見なす。つまり、違いよりも“類似性”に注目しやすいため、さまざまな多様性をもつ人との付き合いが広がる可能性が高い、という。

一方、“狭い人”は『カテゴリー』を限定的に構築し、違いを重視し同質度の高いものだけで『カテゴリー』を形成する人』のことで、この人は違いに対する非寛容性が強く、文化の異なる人々と接する時もささいな相違にまで注目しやすく、排除の倫理が働きやすい。そのため、できるだけ均質な仲間でもとまろうとする傾向がある、という。

この分類の“広く包容力のある人”のように、いろいろな人から影響を受け、もともとあった自分の考え方や文化、価値観を様々な観点から広げ、膨らませていくことができる姿勢が、今後の異文化の理解に必要である、といえるだろう。

東京生まれの日英バイリンガルで国際ビジネスコンサルタントのジョージ・フィールズも「自分の見方でなく、他人の見方で見るよう努めてください。文化が同じでなければ自分を合わせなさい。人の見方を取り入れ、自分の見方を人に押し付けないことです。」⁵と述べているように、先入観による早急な判断を捨て、“他の見方を受け入れる”ということが国際的な異文化の時代では必要である。次からは、“どのような観点から異文化の音楽を受け入れていったらよいか”について述べることにする。

IV — 2 . 違いの中にある共通性

“たくさんの人がいろいろな文化をもっている”という現状の中で、時代と共にさまざまな表現の形態がでてきている。にもかかわらず、このような現代でなぜ異文化の音楽が表現として通用するのだろうか。相倉久人によれば、表現は“個別的な意味性”を離れて、ある“共通の流通性”で成り立っている、という⁶。

以前、筆者が『春の祭典』のバレエのステージを見て大変感動をし、その後何年かして全く違う演出をテレビで見てこれもまた大変感動をしたことを思い出す。表現の仕方は違うが“感動した”ということは共通であり、これは『春の祭典』の音楽のもっている“感動させる力”の一つの現れのようにも思えるのである。バレエ芸術は、音楽から受けたイメージを身体で表現するものであるが、その表現のもととなる“音楽”は同じであるため、音楽の表現に表される感じには共通性がでてくるのであろう。

スペインのアート・パフォーマンスの演出家マルセリは、“彼の演出の中に彼の故郷（カタルーニャ）の文化・精神を感じた”という意見に対して、次のように述べている。

「カタルーニャ人の中にはセニ（理性）とアラウシャ（感情）が共存していると言われる。でも、カタルーニャ人でなくても、どんな人間にも備わっているだろ？どんな人間にも備わっているものだと思うんだ」⁷

住んでいる場所が違っても、基本的に共通する部分があるため、表現をしたときに他の文化の人にも共感するものがある、ということを彼はいいたかったのだろう。

実際、「違う」と思われるという事柄でも、よく考えると共通性があったりするものである。大林太良は、シベリアから北アメリカにかけての針葉樹森林地帯にある一連の文化要素を調査した。シラカンバの樹皮を材料にしてテントやボート、あるいは容器を作って使用するという習俗、モカシン型の靴、持ち運びに便利な独特のゆりかご、動物の肩甲骨をあぶって行う占い、クマを宗教的に畏れ敬う習俗に着目した大林はこう述べる。

「これらは、全く種々さまざまな要素なのだが、それにもかかわらずこの地方にある特別な交通用具たる雪靴と結合していたようにみえるのだ」⁸

大林は、何も関連性がないように見えるこれらのいろいろな要素が、実際には<雪靴文化>という同一の領域をもち、自然環境的な基礎が存在していることを述べている。これはある文化を自然環境の点から共通点を見出した例であるが、このように文化をさまざまな点から考察することによって、今までは気が付かなかった共通点を見出すことができる。

ヨーロッパのアルプス。オセアニアのソロモン諸島のガダルカナル島⁹。アフリカのピグミー族¹⁰。地理的にも文化的にも全く違う一見関連性のないようにみえるこれらの地域には、ヨーデル唱法が用いられている、という共通点がある。船曳健夫は、異文化理解について“他の文化との比較の中で関連性（共通性）を見出していくこと”という観点から、次のように述べている。

「異文化間の理解というのは、常に文化と文化が交互に関係し合っている状態の中で、共通性を生みだしていく動きでもあり、違いを生みだそうとする動きでもあって、その二つは同時に進行している。…文化にとっての理解ということは、いわばそのような（違う文化との）重なり合いにおける違いの中を生きることで、現在の日本の状況では異文化を理解する努力というのは、異なる文化をもつ人との重なり合いの部分を広げていくということになります。」¹¹

オーケストラといえば西洋音楽の印象が強くあり、「トルコのブラスバンド」「日本、中国、朝鮮半島の雅楽」「インドのタンブーラ、シタール、タブラなどを中心とした合奏音楽」「インドネシアのガムラン音楽」などとは別のもののように思われるが、作曲家のみつとみ俊郎は、太鼓の類の打楽器、さまざまな種類の管楽器が大人数で登場することから、「その意味では西洋音楽のオーケストラと何ら変わるところはないようにも思える」とその共通性を述べている¹²。

日本の音楽を代表する民謡などには“ふしまわし”や“こぶし”という表現があるが、朝鮮半島の芸能“パンソリ”¹³や、モンゴルの部族“タタール”の音楽にもこれらがみられ、日本の演歌や追分に酷似している、と江波戸明は述べている¹⁴。また、白石顕二は「スーダンの歌手ムバラクの歌うメロディは日本の民謡に近い」という印象を述べているが、それは「スーダンの音階が日本や中国、韓国と同じように、五音音階の旋律で音楽ができていくから」ということである¹⁵。

このように異文化の中に共通点を見出すことで親近感がわき、共通の話題が出たり共感することも多くなるに違いない。“独りよがりにならず、互いに周辺の文明と理解し合い共

存をしていくためには？”という問いに対して、S. ハンチントンは「“共通則”、つまり各種の文明が『何を共有し』『何を共通項とするか』を探求すべきだ」¹⁶と述べている。“共通点はない”と思われる異文化のものでも別の観点からながめることによって共通点がみつけれ、そこから親近感が表れ、「交流してみたい」という興味も出てくることであろう。

IV－3. 違いからの学習

私たちはいつもありきたりの出来事や生活には退屈を覚える。時にはわれわれの常識（文化・価値観の範囲）では考えられないことに興味をもったりする。A. ストーは“長期間にわたって一人きりで閉じ込められると、必ず退屈を紛らわしてくれる何か刺激のあるものを見つけようと必死になる”ことを例として取り上げ「人間は刺激過剰と同じように、刺激飢餓に苦しむ。」¹⁷と述べている。われわれの身の回りでも日常茶飯事にマスメディアで変わったニュースなどが取り上げられているが、このことからわれわれは“刺激”“変わったこと”を求めている、といえるだろう。

中国では文化大革命の後、西欧のオーケストラとの接触が途絶え、ほとんど西洋音楽に触れる機会がなかった。そのプロパガンダ¹⁸の音楽ばかり演奏してきた中国の「北京中央楽団」と小澤征爾が共演をしたのであるが、ブラームスを初めて弾く彼らの喜びと、基礎技術は高いがブラームスの弾き方を知らないという稀有のオーケストラに出会った小澤のエネルギーがぶつかり合い、小澤は「あれは僕にとっても忘れられない体験だ」とその感動を述べている¹⁹。このように、違うものに触れるという新鮮味があるから人生は面白い、といえるだろう。E. ボールディングは「意見の対立は良き学習材料である」と、違う意見がでることによって“対立が生じなかった時には見えなかった問題の本質が浮き彫りに”なる効用を述べている²⁰。ある問題とされている事柄について違う観点からもみることができる、という点で、ディベートが有効とされるのはそこにある。同じような人間同士が集まるよりは違う考えをもった人間が集うことによって、より発展性のある考えにたどり着くことができるからだ。

1996年東海スクールネット研究会主催でネパールからの参加者を招いて国際シンポジウムが開かれた。“価値観や生活スタイル等が異なる両国民が文化交流をする中で、互いの違いや良さに気づき、理解を深めること”がこのシンポジウムのねらいであったが、実際、「ネパール人しかもっていないものや、経済的、物質的豊かさの中で日本人が既に失ってしまったものや見失っているものが再発見された」という²¹。他の文化の人たちとの交流があったからこそ、こういったことが自覚されたのだろう。1976年に東京で行われた『アジア伝統芸能の交流』の後では、たくさんの聴衆が東南アジアの音楽だけでなく、日本音楽を好きになり和楽器を習ったり吹きたくなくなったりいろいろな変化が起こった²²。小泉文夫は、

「肝心の日本音楽が好きになったということこそ、実は私たちが長い間忘れていた自分自身を知ることであった」とその感想を述べている。

音楽を演奏する人たちの間でも、異文化との交流の中で学びあうことがたくさんあるようだ。聴覚障害をもつドラム奏者のエヴェリン・グレニーは、マリンバ奏者の安部圭子との出会いから多くを学んだことを次のように述べている。

「この自由演奏（安部の即興演奏）は私自身でも思いがけないようなアイデアや情緒をひきだしてくれ、私はマリンバという楽器のもつ可能性に改めて気づいた」²³

バイオリン奏者の古澤巖は、19歳の学生の時にドイツのホルン奏者ペータ・ダムの音に魅せられ、その音を慕いつづけ20年後にやっと念願の共演を果たすことができた²⁴。このように、違う楽器から、音楽の良さを改めて見つけている例もあるが、ジャズ・フュージョン界のギターリストである渡辺香津美は、クラシック界のギターリスト福田進一との共演によって“面白いものを見つけ合おう”とお互いに刺激し合い、その感想を「自分でも音楽の幅が広がってきた。やっぱり難しいけど面白い。まだまだやりつくすことが多いなという感じで楽しいです。」と述べ、音楽のジャンルの違うものが交流することによって学ぶものが多いことを述べている²⁵。

自分の知らないもの、体験したことがないものに触れたときの衝撃は大きい。ドボルザークは二年半のアメリカ滞在中に二つのこと（“独立後わずか百年ながら活気あふれるアメリカのエネルギー”と“素朴なアメリカ民謡、黒人霊歌”）に衝撃を受け、「交響曲第9番《新世界より》」を書き上げたが、彼は「もし私がアメリカを見なければ、この交響曲はこのような特徴をもつものにはならなかったであろう」と語っている²⁶。今まで見たり聞いたりしてきたことと違うことは、その違いが大きければ大きいほど印象は強いものとなる。現代では、YMO（イエロー・マジック・オーケストラ）というグループが“テクノ・ミュージック²⁷の先駆け”として日本で一世を風靡したが、細野晴臣によるとYMOにスピリチュアル（精神的）な刺激を与えたそもそものきっかけは、先にも述べた「北京中央楽団」である、という²⁸。

「他と違う」ということは“同質性を重んじる社会”では異端の存在として考えられるので、今までの価値観に変わるものを取り入れることは勇気のいることである。小澤征爾は「日本人は人のことを気にして、人と違ったことをするのを好まない」反面、「西洋人は個性が強く、創造性が豊かである」と述べているが²⁹、日本でもいろいろな価値観の影響を受け変容したものに対して、その個性を認めるべきだろう。音楽でいえば、西洋音楽だけを基準にして考えると、日本音楽も、アラビア、ペルシャ音楽もトルコの音楽もみんな狂って聴こえるが、西洋音楽が絶対ですべてではない³⁰。それぞれの音楽には独特の美しさがあるわけで、一つの価値観から逸脱するものを“ダメなもの”と決めるのではなく、その存在の価値からも何かを学んでいくことが肝要である。

吉田禎吾は社会の逸脱者の機能に注目している。それによると、元来、伝統文化の規範

から逸脱し、不安や欲求不満を懐き社会的に不適応なものが“異文化を受け入れやすい”という仮説があり、「文化変容の開始は、文化的に型どられた行動様式からはずれた“逸脱行動”によって始まるのだ」という。吉田はさらに、「文化の規範からはずれた行動があっても、その社会から制裁を受けてそのままとまれば文化の変化には至らない」が、「異文化に動機づけられて生まれた数人の偏差行動がだんだん広がるにつれて、もとの文化体系は影響され、変化がうまれてくる。こうして文化変容が始まるわけだ。」とも述べている³¹。違うものの影響を受けてここに“新しい文化が生まれる”ということがこの論から見て取ることができるだろう。

現代は、日本も移民労働者の定住化により、各地で異文化摩擦、民族差別、社会的不利益、移民 2 世の教育問題などが増えてくる可能性を秘めている。こうした問題に対し西欧諸国では「文化的多元主義」（ひとつの社会の内部において複数の文化の共存を是とし、それがもたらすプラス面を積極的に評価しようとする主張ないし運動）を掲げて解決に乗り出しているようである³²。わが国でも、異文化の“違い”を有効に活用していく可能性を見極めていくことが民族の共生にとって重要である。

IV - 4 . 新たな文化の創出

歴史や環境によって形成されてきた異文化同士は、そう簡単に相容れるものではない。にもかかわらず、異文化は“人々の移動”や“時代の流れ”により成長、発展をして今日まで存在してきた。ジプシーは東から西へ旅を続けながら、あらゆるものを彼らが通り過ぎた国々から借用して自分たちの文化に組み込んできた。（例えば、占いの時に使うまじないにインド音階を使ったり、ルーマニアやハンガリーやスラブの民俗音楽を取り入れる時は東洋風な華麗な装飾を用いてジプシー風に改めている）³³

船曳健夫は「文化と文化の間の差異は衝突して対立を引き起こすのではなく、違う要素がそこで溶け合うか、まざり合いながら共存するか、または片方が片方を覆っていくか、さまざまな形で常に変化していくという姿をもつはずである」³⁴と述べている。同じ地域にある異文化がいつまでも“水と油”の関係のように反目しているわけにはいかない。船曳も述べるように、ある文化が異文化の影響を受け、時代と共に変容していることは、様々な歴史が証明しているところである。福島富士夫は南アフリカでの文学の面での「多民族共生の試み」を紹介している³⁵。福島によれば、それまでの南アフリカの伝統である“口承文芸”に加え、“書き言葉”であるヨーロッパ文学も加わり活発な表現をくりひろげていった結果、二つの伝統が対立し合うのではなく、補い合うかたちで新たな文学作品が生み出されていっているという。

文学に限らず、さまざまな非言語の芸術の分野においてもこういった“混交”が行われ、今日まで文化は変化してきた。宮崎恒二も次のように述べている。

「人類は移動することによって、接触し、混交し、そして強制や融和を通じて画一化、個別化を繰り返してきた。文化は創造と破壊、変化を続けてきたのである。現存する文化はそのような変化の結果であり、また変化のプロセスにおいてのみ存在する」³⁶

“新しいもの”というのは、興味津々な若い世代に受け入れられやすい。実際、最近の若者文化のキーワードとして『リミックス (remix)』という言葉がある。辞書ではこの『リミックス (remix)』という言葉は「レコード制作で、同じ素材を別ヴァージョンで新たにミックス・ダウンする場合の作業」³⁷や、「ミキシング (録音) し直す」「混ぜ直す」という意味があるが³⁸、簡単に言ってしまうと、それまで既成概念として異文化であったものを“混ぜてしまう”ということである。一時の流行とってしまうとそれまでだが、若者は、今までであった価値観では考えられなかったような“新しい文化”に対して、大人よりもそんなに抵抗なく受け入れることができるようである。

さて、それでは“新しい文化を創り出す”という視点から、音楽の面の具体的な例について考えてみることにする。

韓国のフォーク歌手、韓大洙は軍事政権下の韓国で少年期を過ごし、アメリカで思春期を過ごした。それ故に、彼の身体にはその当時イデオロギーで対立していた両国の文化が流れていたが、今までにないリズムと音と言葉とを持った彼の歌は、韓国の若者たちに大きな衝撃を与えていった³⁹。既成のイメージとは違う型破りな文化が新しい世代には受けたのだろう。決まりきって固定化されたものは、知欲旺盛な若者たちの関心を高めることは難しい。そこで、今まで存在してきた伝統や価値観にしばられるだけでなく、創造性を加えることによって自国の文化も発展し、若い世代にも受け入れられるのではないだろうか。

時として、それまでの伝統を覆すことは、その伝統の道からは“邪道”“異端”と見られるかもしれないが、今までの日本の伝統音楽の中でも伝統の発展、改革に果敢に挑戦してきた多くの人たちがいる。“箏”の世界で有名な宮城道雄は、彼の代表作ともいえる『春の海』で、それまでの伝統的な奏法に“西洋の和音”や“ハーモニクス”“ピツィカート”などを組み込んでいる⁴⁰。“三味線”の世界の高橋竹山（二代目）は、寺山修司の詩に沖縄の音階を使った津軽三味線の曲を発表したり、韓国のパンソリを三味線の演奏に起用したり、ソウルやブルースの分野の人たちとのセッションをやったりと、“三味線の可能性を広げる”さまざまな挑戦を続けている。高橋はこう述べている。

「初代は、常に津軽三味線の可能性を広げることを考えていました。津軽地方の音楽にとどまるのではなくて、世界に通用する津軽三味線の道です。初代は、さまざまな音楽に興味をもって、世界の音楽から何かを得ようと必死でした。だから、私がジャズやソウルのミュージシャンとセッションをしたりしても、とても興味をもって聴き、後押しをしてきていたのです。同じ津軽三味線をやっている人からは、かなりの異端児にみられていたけれど、初代だけは私の味方でした。（中略）それは初代・高橋竹山が津軽三味線を世界に、と夢見た魂を受け継ぐための作業でもあるんです。」⁴¹

外国でも伝統音楽に他の文化を取り入れている演奏家がいる。タンザニアのキンブトゥは、タンザニアの伝統的な音楽にレゲエ、ルンバの要素をミックスさせ“カルチュラル・ロック”という新しいスタイルで演奏をし、人気を博している⁴²。また、カメルーンではマヌ・ディバンゴがカメルーンの民族音楽とジャズを融合させた『ソウル・マコッサ』(1971年)が大ヒットした⁴³。こういった“新しい試み”から、今までには考えられなかった表現の方法が編み出されたり、異文化の音楽との共演がされたりするなかで、その楽器、さらには伝統音楽そのものの表現の可能性が広がってきたことであろう。

現代作曲家も、伝統音楽に様々な文化の融合を試みて新しい音楽を創り出している。ベンジャミン・ブリテンは、オーケストラとガムラン音楽が見事に混ざり合った『パゴタの王子』という曲を作り⁴⁴、ルー・ハリソンは『オマージュ・トゥ・パシフィック』という曲の中でガムラン楽器のための作品を書いている⁴⁵。オリヴィエ・メシアンが作曲した『七つの俳諧』では、雅楽の“笙”を効果的に使い、それにヴァイオリンをからめるというやり方を探っているが、武満徹や石井真木、そして黛敏郎などの日本の作曲家の作品は雅楽のアンサンブル全体が西洋のオーケストラの中に入り込むやり方を好んで用いている⁴⁶。

最近では、日本のさまざまな地域の音楽も注目されてきている。英国の作曲家、マイケル・ナイマンが沖縄民謡を「世界にいろんな音楽があるが、一番身近に感じる」と語っているように、今、“沖縄の音楽”を求めて欧米のミュージシャンが次々と「融合」を試みているという⁴⁷。アイヌ人の親をもつ日本人のミュージシャン、カノ・オキはCD『Hankapuy』を制作したが、そのCDでは幅広い範囲の音楽の影響(レゲエなど)を含んでいるが、ほとんどの曲は伝統的なアイヌ音楽からのものである、ということである⁴⁸。

富田勲は、太鼓集団“鼓童”との音楽作りの中で「彼らのもっている特有のリズム、そして彼らの生み出す世界に触発されてアイデアが湧いてきた」と述べているように、違った音楽との出会いで新たな着想が生まれることを示唆している⁴⁹。武満徹も「いかなる音をも無垢な状態、新鮮な耳で聴こうとする努力をすることによって、今まで気がつかなかったさまざまな音のひとつひとつに驚きと発見をするようになる」と、さまざまな音楽を主体的に聴くことで、異文化から新しい価値が見出せる可能性を述べている。

このように、異文化の音楽を取り込み、融合することで新しい文化が生まれるのであるが、過去に“文化混交”が行われてきた結果、現在では世界で様々な音楽が“ある土地の既成の音楽”として存在している。そのいくつかを下の表にまとめてみた。

音 楽	含まれている要素
“ジャズ”	イギリス、フランス、スペイン、ハイチ、カリブ海 ⁵⁰
刈ホルの音楽 “ザディオコ”	ルイジアナ(フランス系)、ハイチ黒人系、アメリカ黒人系 ⁵¹
ドミニカの音楽 “メレンゲ”	アフリカ、スペイン ⁵²
ザイールのポピュラー音楽	伝統音楽、欧米、中南米・西アフリカのポップス ⁵³
ペルーの音楽	インカ先住民、ヨーロッパ、黒人 ⁵⁴
ブラジル “サンバ・ヘギ”	サンバ、レゲエ ⁵⁵

これらの分類は大まかなものであり、上にあげた以外にも他の文化の影響を受けてこれらの音楽が形成されてきたことは当然予想される。しかし、ここでいえることは、時を経る中でいろいろな文化が影響し合い、他の文化の要素も加わって、「今後も常に新しい文化が生まれる可能性がある」ということである。その文化混交の過程で人々は新たな出会いをし、その中で友情が育まれていくことだろう。

今日まで、異文化とのコミュニケーションについては“異なった文化の平等”、または“相違を尊重する”考え方の重要性が強調されていた。定形衛が「単なる文化の多元性や共存ではなく、相互に学習し理解していくこと、そして新たな別の文化を創造していく努力が民族の共生を可能にし、確かなものにしていく」⁵⁶と述べているように、今後の異文化の混交が進む社会では、この段でも述べたように“新たに別の文化をつくりだしていく”という視点も重要である。

<注>

- 1 『文化』 聖教新聞 1998. 12. 24 日付、7 p
- 2 『国際関係論とは何か—多様化する「場」と「主体」—』 高田和夫編、法律文化社、1998、168 p
- 3 『平和の文化めざして』 聖教新聞 1999. 5. 25 日付、9 p
- 4 『異文化トレーニング』 八代京子・町恵理子・小泉浩子・磯貝友子共著、三修社、1998、210 p
- 5 『英語ビジネスワールド 4 月』 日本放送出版協会、1999. 4. 28
- 6 『人生読本』 清水勝発行、河出書房、1983、103 p
- 7 『ワールド・ミュージック宣言』 松村洋著、草思社、1990、183 p
- 8 『現代文化人類学 第 2 巻』 中山書店発行、1966、209 p
- 9 『ソロモン諸島の生活誌—文化・歴史・社会』 秋道智彌・関根久雄・田井竜一編、明石書店、1996、194 p
- 10 『世界大百科事典』 日立デジタル平凡社
- 11 『東京大学公開講座 46 異文化への理解』 森 亘著、東京大学出版会、1988、327 p
- 12 『オーケストラとは何か』 みつとみ俊郎著、新潮社、1992、20 p
- 13 朝鮮の民俗芸能の一つで、物語に節をつけて歌うもの。唱劇、劇歌とも呼ぶ。
; 『世界大百科事典』 日立デジタル平凡社
- 14 『世界の音、民族の音』 江波戸 明著、青土社、1992、249 p
- 15 『アフリカ音楽の想像力』 白石頭二著、勁草書房、1993、10 p
- 16 『スーパートーク〜ハンチントン博士と語る 21 世紀文明のゆくえ』 NHK 教育、1998. 9. 6 放送
- 17 『音楽する精神』 アンソニー・ストー著、佐藤由紀・大沢忠雄・黒川孝文訳、白揚社、1994、52 p
- 18 広く触れ知らせること。宣伝。多く思想や教義などの宣伝をいう。; 国語大辞典 (小学館)
- 19 『音楽』 小澤征爾・武満徹著、新潮社、1984、88 p
- 20 前掲 3、9 p
- 21 『ここまでやるか! 国際交流』 教育家庭新聞社発行、1997、63 p
- 22 『音楽の根源にあるもの』 小泉文夫著、平凡社、1994、206 p
- 23 『リズムは心に響く』 エリク・グレン著、岩瀬孝雄訳、サイマル出版会、1992、216 p
- 24 『情熱大陸』 毎日放送 TV、1998
- 25 『新風 8 月号 vol. 116』 佐賀市文化会館発行、1999、9 p
- 26 『第三文明 10 月号』 第三文明社、1998、62 p
- 27 1970 年代に主にドイツで研究開発されていたシンセサイザーを主体とする無機質な音色の音の反復とその展開による音楽を源流とするダンス・ミュージック。; 現代用語の基礎知識 (自由国民社)
- 28 前掲 19、おわりに
- 29 『2000 年代を読む⑩』 読売新聞 1999. 1. 14 日付、1 p
- 30 前掲 22、212 p
- 31 前掲 8、243 p
- 32 前掲 2、153 p

-
- 33 『考える百科シリーズ6 ; 音楽の歴史』三省堂編集所訳、三省堂、1974、7 p / 『The Wonderful World of Music』B. Britten & I. Holst, Aldus Books, 1968.
- 34 前掲 11、327 p
- 35 『南ア文学の豊かさ』聖教新聞 1999. 3. 16 日付、9 p
- 36 『文化の未来』川田順造・上村忠男編、未来社、1997、23 p
- 37 『現代用語の基礎知識 1999 年版 ; CD-ROM 版』自由国民社 1999
- 38 『プログレッシブ英和中辞典 第3版』小学館 1998
- 39 『日韓音楽ノート』姜信子著、岩波書店、1998、168 p
- 40 『比較文化論—異文化の理解—』山口修・斎藤和枝編、世界思想者、1995、93 p
- 41 前掲 26、8 p
- 42 前掲 15、196 p
- 43 前掲 15、32 p
- 44 前掲 12、198 p
- 45 『音楽探し—20世紀音楽ガイド—』小沼純一著、洋泉社、1993、274 p
- 46 前掲 12、119 p
- 47 『アジア編第2部 ; 越境するカルチャー5、ハイブリッド音楽』朝日新聞、1999. 4. 28、8 p
- 48 『Native music holds the power of change』Japan Times 1999. 4. 28 日付
- 49 『ナスカ幻想』鼓動 with 富田勲、SonyRecords CD、SRCL3103、1994
- 50 『アメリカサウス紀行』NHK 教育TV、99. 2. 12 放送、77 p
- 51 前掲 36、44 p
- 52 『国際青年育成交流事業報告書 (第4回)』総務庁青少年対策本部編、1997、105 p
- 53 前掲 15、101 p
- 54 『ペルー音楽への招待』ボンバレコード CD、BOM2060
- 55 『レッツ・プレイ・サンバ』渡辺亮・飯田茂樹共著、音楽の友社、1998、12 p
- 56 前掲 2、168 p

第V章 まとめと考察

これまで、“音”のもつ効果をうまく活用した表現形式としての音楽が、人々の感情を表現し、感情に訴え、その結果人々をつなげ、社会にも大きな影響を与える、ということを書いてきた。また、それぞれの地域ではぐくまれてきた文化は異なるものであるが、そこから共通性を見出したり、違いから何かを学ぶことで他の文化に対する関心や理解が生まれ、新しい文化が創出される可能性についても述べてきた。

現在まで、異文化同士が交流する中で、音楽を通じたコミュニケーションによって友好関係を結んできた数多くの人々がいたことだろう。このようにして交流が進んできた結果、現在の多様な音楽文化に発展してきたわけであるが、異文化間の交流が進む現代は、コミュニケーションとしての音楽の需要が増してくることが予想される。しかし、生活習慣や環境が異なる社会の中で形成されてきた文化はそもそも違うものである。交流を深めていく際には注意をしていかないと、理解できない結果になったり、誤解した理解にもなりかねない。われわれは今後異文化を理解するにあたって、どのような点に留意していけばよいのだろうか。

V-1. 異文化間交流における留意点

V-1.1 実際の音にふれる

われわれが人を判断する際、まだ会ったこともない人を噂だけで判断していることがある。しかし、自分の目で見たら、実際に会ってみると意外と偏見をもっていたことがわかったりするものだ。このように、物事を判断する際、われわれはさまざまな影響を受けているが、音楽も知らず知らずのうちに偏った聴き方をしている可能性がある。実際の音楽を聴いてみると、人の批評とは違った印象を受けることがある。異文化の中で生活している私たちは一人一人価値観や見方が違う。他人の先入観で異文化の音楽を判断せず、実際にその音楽を聴くことが大切である。

同じクラシックのジャンルのピアノ曲であっても、人によっては興味をもつ曲であったり、つまらないと感じる曲であったりする。このように同じジャンルのもので、それぞれの曲のもつ味わいは人によって様々である。最初聴いた時は興味をもっていなくても、聴き続けているうちに感動を覚えることもある。従って、まず、自分の耳で聴くということが大事であると考え、自分の好みに“合うか”“合わないか”の前に、自分の価値観とは違った音楽から何かを聴き出すことができるかもしれない。

V-1. 2 性急な判断を避ける

同じ人でも、日によって反応が違う時がある。精神や身体の状態によるものであったり、情報も日々入れ替わっているのが当然周りから受ける影響も時がたつにつれて変わってくるだろう。食べ物でもそうであるが、子どもの頃嫌いだったものがいつのまにか好きになっていることがある。また、趣味も年と共に変わってくる。つまり、好みや価値観は、同じ人でも時の移り変わりと共に変化をしているということがいえる。まして、普段接していない異文化を理解するには、さらに時間を要するだろう。われわれはとかく自分の価値観と違ったものに対して“好き”とか“嫌い”の判断を早急に下してしまい、次からの行動を決定してしまうことがあるが、一時の判断で、ある文化について“理解できない”としてしまうことは避けねばならない。

リーマーは「急仕立ての意見は『急仕立ての知覚』と『急仕立ての反応』のなせるわざである。一つの芸術作品の複雑な内容に、即座に、深い、高度の知覚と反応をすることのできる人は、まずいない。大多数の場合、判断が速いということは、表面的な段階であることの反映である」¹と述べている。異文化を理解するという点から見れば、時間はかかるだろうが、粘り強く交流を進めていく中で少しずつお互いの理解を深めていくことが必要である。

V-1. 3 背景を知る

音楽で感情が表現されるということは前に述べたが、何を表そうとしているのかその内容を詳細に知ることは容易ではない。なぜなら、音楽は、言葉の場合と違いその意味する内容を示すことができないからである。ましてや異文化の人にとっては、育ってきた環境が大きく異なるため、理解は容易ではないことが予想される。

人間は、皆、それぞれの認知システムに“癖”がある。つまり、「独自のサングラスを通して」認知しているため、元の意図している内容とは変わって認識してしまうこともある²。そこで、音楽についての解説があれば、その音楽が意味したい内容をとらえる参考になるだろう。ただ漠然と音を聞くのではなく、その作品についての内容や背景が言葉で説明されることによって、その音楽のもつ価値や意味をイメージすることができ、音楽が表現しようとするものをとらえようと真剣に耳を傾けることができる。このようなことから、異文化の人と交流をもつ場合には、イメージを助けるような背景を説明することが理解の手助けとなるだろう。

V-1. 4 よい音楽にふれる

「よい音をたくさん経験した子は、よい音を聴くのが好きになる」³という。このことから

も、異文化との交流を進めていくのにはよい音楽が提供されることが望まれるだろう。

それでは、ここでいうよい音楽とは何であろうか。リズムや音程、ハーモニーが洗練されているに越したことはない。感性を育てるのは美的教育の一つの目的であるが、リーマーはそうした美的教育の機能を十分果たすための条件で「使用する音楽は、その創造された美的特質の中に、人間への感情への洞察を与える条件をもった音楽でなければならない」⁴と述べている。つまり、その音楽の中に“真の表現性”があり、“共有できるものがある”、ということが必要であることがいえる。

中国の歌手、崔岩光が「感動させられるかどうかは自分の力にかかっています。自分が感動できなければ、聴衆を感動させることはできません。」⁵と述べているように、演奏者の魂から溢れるような演奏は相手に感動を与える。いくら技術が備わっている人の演奏であっても、そこにその音楽に対する情熱や気持ちがなければ感動は伝わらないのではないだろうか。

心から感動したものは、いつまでも思い出として心に残る。日本・韓国青年親善交流事業（第11回）に参加した女性はその感動体験について「後々まで静かに心に響き続け、何度も思い出しては考え込み、それから元気が出てくるような…そんな静かな感動体験の連続だった気がする。」⁶と、その感動体験を通じて自分が変わりつつある、ことを述べているが、音楽もその場限りのものではなく、後々まで心に響くような音楽がよい音楽といえるだろう。そうして、感動したり、楽しい経験をする中で、その音楽が良い思い出として心に残り、また聴きたいという気持ちが起きたり、異文化に対しての関心が高まることであろう。

V-2. 音楽をコミュニケーションに役立てる

これまで述べてきたように、音楽には言語では表わせない非言語コミュニケーションの媒体としての役割があり、人々の心を結びつける役割を果たしてきた。小倉利丸も「音楽の興味深いところは、非常に鮮明な文化的な固有性を担っているように見えながら、しかし同時にまたやすやすと文化の境界を乗り越えて、異なる文化の中に伝播しうる力を持っているということだろう」⁷と述べているように、音楽は異文化間でも伝わる可能性を秘めている。筆者もアメリカでの滞在の折、言葉が思うように通じずコミュニケーションがうまく図れない状況の中で、現地の人たちと一緒に音楽を演奏する活動をとおして心と心のつながりができ、たくさんの友人をつくることができた。ストラヴィンスキーが「音楽の深遠な意味と本質的な目的は…交わりの状態、つまり仲間や至高の存在との結びつきを促進することにある」⁸と述べているように、人々の心のつながりが薄れてきた現代において、音楽を通して他の存在との交流を図ることが“音楽のもつ大きな役割”といえる。

そしてさらに異文化との交流においては、その違いをプラスの方向に生かしていくことが大切である。川口道朗が「複数の文化に触れたほうが特徴や美的価値についての理解が

深まる」⁹と述べているように、他の文化に触れることで自分の文化だけでは気がつかなかった点も発見することができるであろう。テキサスの音楽グループ、ブレイブ・コンボは“ポルカ”を彼らの音楽スタイルにしているが、「メキシコ音楽のレコード店に行って新しいレコードをどんどん買うようになってから、自分はポルカでもどうするのが好きでどうするのがあんまり好きではないかということもだんだんわかってきた。いろんなポルカの違いとか、それらの関係に興味をもつようになった。」¹⁰と、他の音楽との出会いによって、彼らの音楽の幅が広がったことを示唆している。人間は“刺激を追い求める”ことは前にも述べたが、こういった異文化との交流によって自分のもっていた観念や価値観を高め、見つめていくことができるだろう。

国連は本年を「平和の文化のための国際年」と定めている。人の心に直接届く“音楽”という芸術文化をコミュニケーションの中で活用していくことによって、異文化の人たちと深い心のつながりを結んでいくことが、新しい平和な社会の形成に役立っていくのではないだろうか。

<注>

- 1 『音楽教育の哲学』ベネット・リーマー著、丸山忠璋訳、音楽之友社、1987、146 p
- 2 『異文化トレーニング』八代京子・町恵理子・小泉浩子・磯貝友子共著、三修社、1998、211 p
- 3 『幼児指導の心理講座；5.音楽リズム』田中教育研究所編、明治図書、1968、15 p
- 4 『音楽教育の哲学』ベネット・リーマー著、丸山忠璋訳、音楽之友社、1987、99 p
- 5 『サンデーインタビュー』聖教新聞 1999.2.3 日付
- 6 『第 11 回日本・韓国青年親善交流事業報告書』総務庁青少年対策本部編、1997、58 p
- 7 『音の力』DeMusik Inter 編、インパクト出版会、1996、239 p
- 8 『音楽する精神』アンソニー・ストー著、佐藤由紀・大沢忠雄・黒川孝文訳、白揚社、1994、
- 9 『音楽における国際理解教育』川口道朗、エムティ出版、1994、3 p
- 10 『ワールド・ミュージック宣言』松村 洋著、草思社、1990、194 p

引用・参考文献

<国際化>

- 『教室の国際化進む』朝日新聞 1996.2.16 日付朝刊
 『国際関係概論』川田侃著、東京大学出版会、1958
 『国際関係論とは何か—多様化する「場」と「主体」—』高田和夫編、法律文化社、1998
 『ここまでやるか！国際交流』教育家庭出版社発行、1997
 『国際交流 第66号』国際交流基金発行、1995
 『国際協力プラザ 12月号—vol.54』国際協力推進協会発行、1998
 『国際青年育成交流事業報告書（第4回）』総務庁青少年対策本部編、1997
 『国際関係論とは何か—多様化する「場」と「主体」—』高田和夫編、法律文化社、1998
 『国際協力9月号—世界をつなぐ音楽』国際協力事業団発行、1999
 『国際化と情報化』濱口恵俊編著、日本放送出版協会、1992
 『日本人と国際化』天沼香著、吉川弘文館、1989
 『日本人の国際化』澤田昭夫・門脇厚司編、日本経済新聞社発行、1990
 『第11回日本・韓国青年親善交流事業報告書』総務庁青少年対策本部編、1997
 『国際化時代の教育』東京学芸大学海内子女教育センター発行、1989
 『国際理解教育—地球市民を育てる授業と構想』大津和子著、国土社発行、1992

<コミュニケーション>

- 『高度情報化社会のコミュニケーション』東京大学新聞研究所発行、1990
 『コミュニケーション・入門』船津衛著、有斐閣アルマ、1996
 『異文化コミュニケーション』岡部朗一監修、有斐閣、1996
 『異文化間コミュニケーション』J.コンドン著、近藤千恵訳、サイマル出版会、1980
 『現代社会とコミュニケーション；第1巻 基礎理論』内川芳美・岡部慶三・竹内郁郎・辻村明編、東京大学出版会、1973
 『コミュニケーションの数学的理論—情報理論の基礎—』C.E.シャル・W.グアイヴァー著、長谷川淳・井上光洋訳、明治図書、1969
 『異文化とコミュニケーション』マイケル・H・フロッパー著、岡部朗一訳、東海大学出版会、1982
 『コミュニケーションの記号論』中野収著、有斐閣、1984
 『文化とコミュニケーション』E.リーチ著、青木保・宮坂敬造訳、紀伊国屋書店、1981

<文化>

- 『文化の未来』川田順造・上村忠男編、未来社、1997
 『東京大学公開講座 46 異文化への理解』森亘著、東京大学出版会、1988
 『異文化を読む』岡部朗一著、南雲堂、1988
 『異文化トレーニング—ボーダレス社会を生きる』八代京子。町恵理子、小泉浩子、磯貝友子共著、三修社、1998
 『異文化を読む』岡部朗一著、南雲堂、1988
 『比較文化論 異文化の理解』山口修・斎藤和枝編、世界思想社、1995
 『人間と文化』新書編纂委員会編、三愛会、1980
 『平和の文化めざして』聖教新聞 1999.5.25 日付

『現代文化人類学 第2巻』中山書店発行、1966

<音楽>

『音楽における国際理解教育』川口道朗、エムティ出版、1994

『音楽の根源にあるもの』小泉文夫著、平凡社、1994

『音楽する精神』アンソニー・ストー著、佐藤由紀・大沢忠雄・黒川孝文共訳、白揚社、1994

『メディア・ワールド⑨音楽と音響』スタジオ・オ・ハート・インコーポレーテッド編著、リブリオ出版、1985

『音楽の語るもの』J.ペインター・P.アストン著、山本文茂・坪能由紀子・橋都みどり訳、音楽之友社、1982

『音楽する社会』小川博司著、勁送書房、1988

『考える百科シリーズ⑥音楽の歴史』三省堂編修所訳、三省堂、1974

『音楽行動の心理学』E.トドシー・J.ボイル共著、徳丸吉彦、藤田芙美子、北川純子共訳、音楽之友社、1985

『ハンスリックの音楽美論』田村寛貞訳著、音楽之友社、1956

『子どもの発達と音楽』筧三智子著、音楽之友社、1977

『音楽ってななに』伊能美智子著、春秋社、1987

『音楽教育の哲学』ベネット・リーマー著、丸山忠璋訳、音楽之友社、1987

『音楽の不思議』別宮貞雄著、音楽之友社、1971

『音楽療法』レスリー・バント著、稲田雅美訳、ミネルヴァ書房、1997

『音楽』小澤征爾・武満徹著、新潮社、1984

『考える百科シリーズ6；音楽の歴史』三省堂編集所訳、三省堂、1974

『音楽探しー20世紀音楽ガイドー』小沼純一著、洋泉社、1993

『子供の発達と音楽』筧美智子著、音楽之友社、1977

『音の力』Demusik Inter編、インパクト出版会、1996

『音楽に生きる』D.バレンボイム著、蓑田洋子訳、音楽之友社、1994

『音楽探しー20世紀音楽ガイドー』小沼純一著、洋泉社、1993

『世界音楽の時代』ブルーノ・ネトル著、細川周平著、勁草書房、1989

『バーンスタイン音楽を生きる』L.バーンスタイン・E.カスティオーネ著、笠羽映子訳、青土社、1999

『生命が音になるとき』千住真理子著、オーム社、1995

『音楽教育を読む』野村幸治・中山裕一郎編著、音楽之友社、1995

『小室等的 {音楽的生活} 事典』小室等著、晶文社、1989

『オーケストラとは何か』みつとみ俊郎著、新潮社、1992

『リズムは心に響く』エヴェリン・グレイ著、岩瀬孝雄訳、サイマル出版会、1992

『幼児指導の心理講座⑤音楽リズム』田中教育研究所編、明治図書、1968

『日韓音楽ノート』姜信子著、岩波書店、1998

『はじめての世界音楽』柘植元一・塚田健一編、音楽之友社、1999

『ソロモン諸島の生活誌—文化・歴史・社会』秋道智彌・関根久雄・田井竜一編、明石書店、

1996

『アフリカ音楽の創造力』白石頭二著、勁草書房、1993

『インド音楽との対話』田森雅一著、青弓社、1990

『世界の音・民族の音』江波戸昭著、青土社、1992

『ワールド・ミュージック宣言』松村洋著、草思社、1990

『アジア編第2部；越境するカルチャー5』朝日新聞1999.4.28日付朝刊

『レッツ・プレイ・サンバ』渡辺亮・飯田茂樹共著、音楽之友社、1998

『サンバの国に演歌は流れる』細川周平著、中公新書、1995

<新聞>

- 『レジャー白書'99にみる余暇意識』読売新聞 1999.4.28 日付
『共生できない人権意識をこえて』聖教新聞 1998.12.24 日付
『社説』聖教新聞 1999.1.6 日付
『学校を交流の場に』佐賀新聞 1999.5.31 日付朝刊
『論壇』朝日新聞 1996.9.4 日付朝刊
『サンデー・インタビュー；崔岩光』聖教新聞 1999.2.3 日付
『共生できない人権意識をこえて』聖教新聞 1998.12.24 日付
『2000年代を読む⑩』読売新聞 1999.1.14 日付朝刊
『南ア文学の豊かさ』聖教新聞 1999.3.16 日付
『対談』聖教新聞 1998.12.2 日付
『Native music holds the power of change』Japan Times 1999.4.28 日付
『高齢者楽団増えてます』読売新聞 1999.8.31 日付朝刊
『越境するカルチャー⑤ハイブリッド音楽』朝日新聞 1999.4.28 日付朝刊

<CD・ビデオ>

- 『θ波 リラクゼーションのための眠りの音楽』CD、アポロン、APCE-5167、1991
『ペイネ・愛の世界旅行』CD、SLCS7306、サウンドトラック・リスナーズ・コミュニケーションズ
『ナスカ幻想』鼓動 with 富田勲、SonyRecords CD、SRCL3103、1994
『ペルー音楽への招待』CD、ボンバレコード、BOM2060
『野生の驚異～意思の伝達』ビデオ、ほるぷ出版（タイムライフ ビデオ配給）.1991
『夜明けのランナウェイ』CD、PolyGram Records、PHCR-4267、1987

<TV>

- 『金曜フォーラム“日韓地域交流をどうすすめるか”』、NHK 教育 TV、1998
『アメリカサウス紀行』NHK 教育 TV、99.2.12 放送
『スーパートーク～ハンチントン博士と語る 21 世紀文明のゆくえ』NHK 教育 TV 1998
『情熱大陸』毎日放送 TV、1998
『NHK英語ビジネスワールド』NHK 教育 TV 10 月 7 日放送、1998
『金曜フォーラム～日韓地域交流をどうすすめるか』NHK 教育 TV、1998
『知ってるつもり』日本テレビ、1996.8.1 放送
『NHK英語ビジネスワールド 3 月号』、日本放送出版協会、1999.3.31 放送
『英語ビジネスワールド 4 月』日本放送出版協会、1999.4.28 放送
『金曜フォーラム “日韓地域交流をどうすすめるか”』NHK 教育、1999.8.2 放送

<その他>

- 『統計で見る日本 1999 年版』日本統計協会発行、1998
『人生読本』清水勝発行、河出書房、1983
『モグラフ・中学生の世界 vol.61・キレル・むかつく』ベネッセ研究所発行、1998
『21 世紀は地球っ子の時代—家庭・地域・学校—』榎田勝利著、中央出版、1989

- 『植物と話がしたい』神津善行著、講談社、1998
『世界大百科事典』CD-ROM、日立デジタル平凡社、1998
『田植歌アジアフェスティバル10周年記念誌』西有田町役場、1997
『人はなぜ色にこだわるか』村山貞也著、KKベストセラーズ、1996
『心の月は沈まない』大島彰著、河出書房新社、1995
『現代用語の基礎知識'1999 CD-ROM版』自由国民社発行、1998
『マクルーハン入門』M.マクルーハン・E.カーペンター編著、大前正臣・後藤和彦訳、サイマル出版会、
1967
『芸術学；改訂版』渡辺護著、東京大学出版会、1983
『Communication4月号 No.78』NTT出版発行、1999
『ルソー全集第1巻』ジャン・ジャック・ルソー著、小林喜彦訳、白水社、1979
『新風 8月号 vol.116』佐賀市文化会館発行、1999
『第三文明 10月号』第三文明社、1998
『英語ビジネスワールド』日本放送出版協会、1999
『現代用語の基礎知識 1999年版；CD-ROM版』自由国民社 1998
『鳥の歌』パブロ・カザルス著、池田香代子訳、筑摩書房、1989